



一般財団法人 日本鯨類研究所

東京事務所：〒104-0055 東京都中央区豊海町4-5 豊海振興ビル5F（代表）03-3536-6521（FAX）03-3536-6522

太地事務所：〒649-5171 和歌山県東牟婁郡太地町大字太地1770-1 国際鯨類施設内（代表）0735-29-2281（FAX）0735-29-2282

E-mail: webmaster@icrwhale.org HOMEPAGE <https://www.icrwhale.org>

◇ 目次 ◇

南極海鯨類資源調査（JASS-A）中間レビューワークショップの概要

..... 磯田 辰也（日本鯨類研究所・第1研究部門次長）	1
母船式捕鯨業における2025年度生物調査	久野 友愛（日本鯨類研究所・調査センター） 12
日本鯨類研究所太地事務所・図書室の紹介.....	大藪 恭久（日本鯨類研究所・図書広報室） 20
日本鯨類研究所関連トピックス（2026年3月～2026年5月）.....	30
日本鯨類研究所関連出版物情報（2026年3月～2026年5月）.....	35
京きな魚（編集後記）	36

南極海鯨類資源調査（JASS-A）中間レビューワークショップの概要

磯田 辰也（日本鯨類研究所・第1研究部門次長）

はじめに

日本は、南極海において鯨類資源の持続的利用を目的として1987/1988年度から2018/19年度まで、南極海鯨類捕獲調査（JARPA/JARPAII: Japanese Whale Research Program under Special Permit in the Antarctic、1987/88-2013/14年度）、南極海鯨類目視調査（Japanese dedicated whale sighting survey、2014/15年度）、ならびに新南極海鯨類科学調査計画（NEWREP-A: New Scientific Whale Research Program in the Antarctic Ocean、2015/16-2018/19年度）を実施してきた。長期間にわたり一貫性をもって行われた総合的な鯨類調査は、クロミンククジラの性成熟の低年齢化、大型鯨類の個体数の急速な回復や生息域の拡大を捉え、南極海の鯨類の生態や資源状態が変化し続けていることを明らかにしてきた。しかしながら、日本政府による2019年（令和元年）6月30日の日本の国際捕鯨委員会（IWC）脱退に伴い、鯨類の資源管理に重要なこの調査プログラムは終了した。この他にも、IWCによる1978/1979年度から2009/2010年度まで行われた国際鯨類調査10ヶ年計画（IWC IDCR: International Decade of Cetacean Research、1978/79-1995/96年度）と南大洋鯨類生態系調査（IWC SOWER: Southern Ocean Whale and Ecosystem Research、1996/97-2009/10年度）の2つは、大型鯨類の資源量及びそのトレンドに関する貴重な研究データ等を提供したが、いずれも終了している。

鯨類の資源管理と海洋生態系を把握するには、一貫性と連続性のある科学的なモニタリング調査が必要不可欠であることから、日本政府は、すみやかに2019年に目視調査やその他の非致死的手法を用いる新しい調査計画、南極海鯨類資源調査（JASS-A: Japanese Abundance and Stock-structure Surveys in the Antarctic、ジャスエイ）を策定した。この計画は、2019年のIWC科学委員会（SC）（GOJ, 2019a）なら

びに同年の南極の海洋生物資源の保存に関する委員会の生態系モニタリング管理作業部会（CCAMLR-EMM）（GOJ, 2019b）と北大西洋海産哺乳動物委員会の科学委員会（NAMMCO SC）（GOJ, 2019c）において、科学的有用性が認められ、過去のプログラムの目視調査活動を引継ぎ、2019/20 年度より途切れることなく調査航海が行われている。

JASS-A では、当該研究に携わる科学者および運営委員会の招聘する専門家から研究成果の批評を受けることが計画に盛り込まれており、それに基づき、2025 年 10 月に JASS-A の進捗状況を評価する中間レビューワークショップが開催された。本稿では、このワークショップについて報告する。

JASS-A 中間レビューワークショップ

開催目的

本ワークショップは、以下を目的に開催された。

- i) JASS-A の主目的および二次的目的に関連して、これまで（2019/20-2024/25 年度）に実施された研究結果を評価すること。
- ii) プログラムの最終的なレビューまでに JASS-A の主目的および二次的目的を達成することを目指し、今後のフィールドワークおよび解析に関する提言を議論すること。

ワークショップの開催

本ワークショップは、2025 年 10 月 20 日から 22 日にかけて東京にて対面で開催された。議長を当研究所のルイス・パステネ科学アドバイザーが、副議長を筆者が務め、鯨類研究の第一人者である 5 名の招待科学者、マーティン・ビウ氏（ノルウェー海洋研究所、ノルウェー）、ダグ・バターワース氏（ケープタウン大学名誉教授、南アフリカ）、グレッグ・ドノバン氏（元国際捕鯨委員会科学部長、イギリス）、ラルフ・ティーデマン氏（ボツダム大学、ドイツ）、ラース・ワロー氏（オスロ大学名誉教授、ノルウェー）と日本側の科学者（当研究所 13 名、東京海洋大学 2 名、国外研究者 4 名（web 参加））の計 24 名により、JASS-A のデータに基づく合計 28 の研究論文（RW/25/JS1-JS29）について議論が交わされた。そして、各研究への評価が行われ、最終的に今後の研究発展に必要な提言がまとめられた。



写真 1. 議論の様子。

JASS-Aの研究目的および調査活動

レビューの開始にあたり、JASS-A の目的と内容が概説された。主目的は、(1) 大型鯨類の資源量およびそのトレンドに関する研究、(2) 大型鯨類の分布、回遊ならびに系群構造の研究であり、その他にも海洋環境、マリンデブリおよびクジラの生物学に関連するいくつかの二次的な研究目的が設定されていることが説明された。そして、過去の鯨類目視調査と同様に IWC の調査ガイドラインに基づくディスタンスサンプリング法（ライントランセクト）を用いた非致死的手法による系統的な目視調査であり、1 隻または 2 隻の目視専門調査船により南緯 60 度以南の IWC 管理海区の III 区、IV 区、V 区、VI 区で実施されていること、暫定的な調査期間は、南半球の夏期 8 シーズン（2019/20-2026/27 年度）に設定していることが解説された。また、

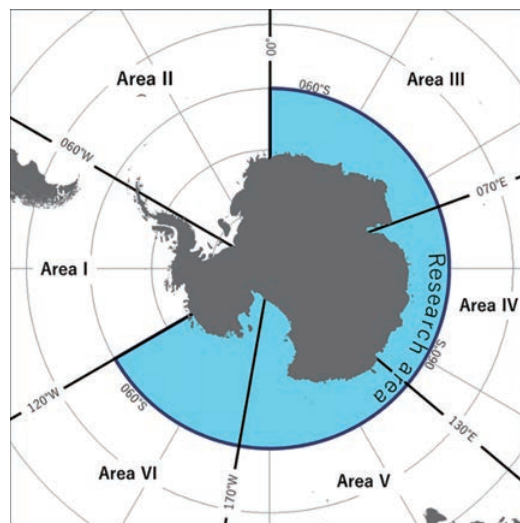


図1. JASS-A の調査海域（水色の範囲）。

収集する新規データに加え、同じ調査海域で行われてきた過去の調査（JARPA/JARPAII、NEWREP-A）のデータも含めた解析が可能のため、一貫性のある大規模なデータセットに基づいた研究であることも説明された。さらに、2019/20-2024/25 年度の期間の調査結果概要についても報告が行われた（RW/25/JS1）。

系群構造に関する研究

クロミンククジラ

遺伝学的研究（RW/25/JS2）、目視調査による発見分布（RW/25/JS3）、衛星標識に関する情報（RW/25/JS4）の研究に基づき議論が行われた。その結果、南極海における本種の系群構造は、調査海域の西側海域に東部インド洋系群（I 系群）、東側海域に西部南太洋系群（P 系群）が存在し、空間的に IV 区東と V 区西で混合していることを示す仮説が支持された。

今後、解析を進める上で考慮すべき点として、遺伝学的研究では、過去からの全データを用いた系群の混合に関する時間的・空間的パターンの解析が推奨された。衛星標識の研究では、南極海と繁殖海域の関連性を解明するため標識の装着は調査期間の後半に取り組むこと、標識の装着方法や仕様について国際的に協力していくこと、装着個体のバイオプシー標本の解析を進め、移動経路と遺伝学的情報から系群構造を検討することが提案された。発見分布に関する研究では、空間モデリングの手法を用いた解析が推奨された。

ザトウクジラ

遺伝学的研究（RW/25/JS8）、目視調査による発見分布（RW/25/JS3）、自然標識写真の情報（RW/25/JS10）の研究に基づき議論が行われた。南極海におけるザトウクジラの系群構造は、従来の仮説と同様に 7 つの系群（西オーストラリア、東オーストラリア、ニューカレドニア、トンガ、フランス領ポリネシア、クック諸島、コロンビア）に分類される仮説が支持された。

今後、解析を進める上で考慮すべき点として、遺伝学的研究では、現解析のミトコンドリア DNA のマーカーでは、識別能力が低く、個体の系群の割り当てに不確実性が残っていること、ハプロタイプ頻度に基づく尤度割り当て法は有用であるものの妥当性の評価が引き続き必要であることが指摘された。また、核 DNA マーカーを解析に導入することも提案された。自然標識写真では、IWC 等のデータベースとの連携が推奨された。

ナガスクジラ

遺伝学的研究 (RW/25/JS11)、目視調査による発見分布 (RW/25/JS3)、衛星標識に関する情報 (RW/25/JS4) の研究に基づき議論が行われた。南極海における本種の系群構造は、JASS-A の調査海域 III-VI 区の範囲では、単一系群であるという仮説が受け入れられた。

今後、解析を進める上で考慮すべき点として、遺伝学的研究では、衛星標識による追跡で経度方向の移動が観察されなかった III 区西のクジラについて軽微な遺伝的差異の存在有無を検証することと、他海域間との比較解析が推奨された。衛星標識の研究では、短期間 (1 日単位以下) の移動速度に関する解析の実施と南緯 60 度以北でのナガスクジラへの標識装着が提案された。

シロナガスクジラ

遺伝学的研究 (RW/25/JS12)、目視調査による発見分布 (RW/25/JS3)、自然標識写真の情報 (RW/25/JS10) の研究に基づき、系群構造について議論が行われ、南極海においては本種が単一系群であることが支持された。ただし、留意すべき点として、距離的隔離に起因すると推測される微細な遺伝的構造により南極海全域では完全にランダムな交配が行われていない可能性が考えられること、シロナガスクジラとピグミーシロナガスクジラとの間で、時折交雑が起こることについて言及があった。

今後、解析を進める上で考慮すべき点として、遺伝学的研究では、今回、系群構造推定で本種に導入したゲノム全体を対象とする網羅的な研究手法 (一塩基多型解析: Single Nucleotide Polymorphism (SNP) analysis) は、将来的に他の鯨類種にも適用可能な有効な手法であることが解説された。また、比較対象として大西洋のシロナガスクジラのサンプルを含めて解析することが推奨された。自然標識写真については、IWC の研究者らと協力して研究を継続することが提案された。

ミナミセミクジラ

遺伝学的研究 (RW/25/JS13、JS14)、目視調査による発見分布 (RW/25/JS3)、自然標識写真の情報 (RW/25/JS10) の研究に基づき議論が行われた。南極海における本種の系群構造については、II 区-III 区ではアルゼンチン/南アフリカ沖、主に IV 区ではオーストラリア、IV 区東-V 区ではニュージーランドの繁殖海域とつながりが示唆され、特に、IV 区とオーストラリアとの関連性は、今回の研究データによって強く裏付けられることが確認された。

今後、解析を進める上で考慮すべき点として、遺伝学的研究では、系群の出現状況と混合のさらなる評価のため、II 区、III 区、および V 区のサンプル数を増やすこと、自然標識写真では、低緯度海域で蓄積されている海外データベースとの協力が推奨された。

系群構造—研究の評価と提言

JASS-A は、南極海で系群構造および移動や繁殖海域との関係性を解明するための他に類を見ない大規模な遺伝学的ならびに非遺伝学的データを蓄積しており、その両方の研究における着実な進展が高い評価を受けた。

今後の提言は、シロナガスクジラで実施した SNP 解析について他の種への導入が推奨された。その理由として、現在の主な遺伝学的データが過去のデータセットとの統合や比較が容易な一般的なマーカー (ミトコンドリア DNA 制御領域塩基配列) で構成されており、それは、微細な系群構造を解析するためには解像度が不足する可能性が説明された。この手法を適応する場合、第一候補となるのは、膨大なデータがあるクロミンククジラが望ましく、さらなる詳細な解析に期待が示された。

また、バイオプシー標本の収集は、南極海の全海域を網羅すべきであり、IDCR/SOWER 以降、I 区と II 区は系統的な調査が行われておらず、それらの情報を JASS-A の研究に含めることができれば、鯨類の系

群構造の理解に大きく寄与することが提言された。同様に、繁殖海域からの比較標本をさらに充実させることで、季節的な移動パターンの理解が深まることも言及された。移動に関しては、遺伝学的研究を補完するために、自然標識写真による個体識別と衛星標識による追跡の重要性が説明され、自然標識写真については、国際的なデータカタログへの協力に期待が示された。衛星標識の取組みについては、主に繁殖海域の情報が不足しているクロミンククジラ、ナガスクジラ、シロナガスクジラ等に焦点を当て、装着時期を集中させることにより繁殖海域への北上移動を捕捉できる可能性が高まること、標識の装着持続期間を延ばすため技術発展の重要性が説明された。また、ここに挙げられたいずれの取組みについても国際的な協力の必要性が提言された。

資源量推定に関する研究

ヒゲクジラ類の資源量推定値

2014/15-2022/23 年度の目視調査データに基づき、 $g(0)=1$ （観察者による見逃しを 0 と仮定）の仮定の下、ヒゲクジラ類の資源量が推定された（RW/25/JS5、JS15）。

表 1. 調査海域（南緯 60 度以南）におけるヒゲクジラ類の資源量推定値（ $g(0)=1$ と仮定）。

	Area III (タイムスタンプ: 2019/20)	Area IV (タイムスタンプ: 2014/15)	Area V (タイムスタンプ: 2017/18)	Area VI (タイムスタンプ: 2020/21)
シロナガスクジラ	1,938 (CV: 0.280)	842 (CV: 0.318)	1,657 (CV: 0.305)	2,076 (CV: 0.353)
ナガスクジラ	40,649 (CV: 0.116)	8,630 (CV: 0.264)	5,394 (CV: 0.399)	12,281 (CV: 0.150)
クロミンククジラ	33,402 (CV: 0.194)	13,250 (CV: 0.191)	41,972 (CV: 0.206)	34,702 (CV: 0.165)
ザトウクジラ	86,144 (CV: 0.101)	60,179 (CV: 0.116)	23,130 (CV: 0.233)	7,673 (CV: 0.207)
ミナミセミクジラ	-	1,958 (CV: 0.439)	-	-

留意事項：

- ・ナガスクジラの夏季の主要分布域は、南緯 60 度以北に位置するため、上記の資源量は過小な推定値となる。
- ・ミナミセミクジラの摂餌海域の一部は南緯 60 度以北にあるため、上記の資源量は過小な推定値と考えられる（南緯 60 度以南の IV 区以外で本種の発見がほとんどないのは、この生態学的要因による可能性が高い）。

今後、解析を進める上で考慮すべき点として、現解析とは異なるモデル選択基準を検討すること、鯨種によっては来遊量の変化に起因する追加分散の影響を受けている可能性があること等の技術的な点が指摘された。また、ナガスクジラは主要分布域が調査海域以北（60 度以北）であることから、南緯 60 度以北における調査の実施が奨励された。

ハクジラ類の資源量推定値と分布

2014/15-2022/23 年度の目視調査データに基づき、 $g(0)=1$ の仮定の下、ハクジラ類の資源量が推定された（RW/25/JS17）。

表 2. 調査海域（南緯 60 度以南）におけるハクジラ類の資源量推定値（ $g(0)=1$ と仮定）。

	Area III (タイムスタンプ: 2019/20)	Area IV (タイムスタンプ: 2014/15)	Area V (タイムスタンプ: 2017/18)	Area VI (タイムスタンプ: 2020/21)
マッコウクジラ	1,740 (CV: 0.201)	1,022 (CV: 0.319)	1,149 (CV: 0.411)	665 (CV: 0.357)
ミナミトックリクジラ	4,768 (CV: 0.436)	5,195 (CV: 0.303)	1,463 (CV: 0.640)	68 (CV: 1.013)
シャチ	2,054 (CV: 0.454)	7,649 (CV: 0.254)	25,877 (CV: 0.397)	4,871 (CV: 0.275)

留意事項：

- ・上記の資源量は、 $g(0)=1$ と仮定しているため、長時間潜水を行うハクジラ類では、過小な推定値と考えられる。
- ・マッコウクジラの資源量推定値は、高緯度海域に回遊する大型の成熟オス（単独群）のみを対象としている。

シャチは南極周極流の南限に沿って調査海域全体に広く分布しており、マッコウクジラでは南緯 60 度から南極周極流の南限の間に広く分布する傾向が観察された (RW/25/JS16)。

今後、解析を進める上で考慮すべき点として、長時間潜水を行うマッコウクジラやミナミトククジラ等は、絶対的な資源量推定値を得ることが難しいことが認識された。そして、 $g(0)=1$ の推定値の提示・解釈には注意が必要であること、南極海には大型の雄のマッコウクジラのみが来遊するため資源量は個体群の一部の推定になること、シャチでは、エコタイプごとの推定値を得るのが最良だが、現時点においては実現が困難であるとの見解が述べられた。

予備的な $g(0)$ (見逃し率) 推定

予備的な $g(0)$ の推定について、TOP バレルに目視観察員 2 名、IO プラットフォームに目視観察員 1 名を配置し、トラックライン上にクジラがいたと仮定した場合の TOP バレルまたは IO プラットフォームのいずれか、あるいは両方による推定された検出確率は、クロミンククジラで 0.856 (CV=0.034)、ザトウクジラで 0.964 (CV=0.007)、ナガスクジラでは 0.976 (CV=0.009) であった (RW/25/JS6)。また、可用性バイアスを推定するために必要な潜水 / 浮上間隔のデータ収集を目的としたデータロギングの予備的な取り組みについても報告された (RW/25/JS7)。

今後、解析を進める上で考慮すべき点として、モデル選択基準の検討や、潜在的な重複データを含めること等、解析上の技術的な点が確認された。潜水 / 浮上間隔のデータ収集では、ロガー装着がクジラの行動にどのような影響を与えるか考慮が必要であることと、他鯨種の研究例も参考にするように提言があった。

資源量推定—研究の評価と提言

長年にわたる一連の資源量推定の解析は、現在進行形で変化する南極海の生態系を研究する上で極めて重要であり、体系的な調査を継続する JASS-A の取り組みが高い評価を受けた。そして、JASS-A は、南極海の鯨類の分布と資源量に関する膨大な体系的情報を生み出し続けており、IWC IDCR/SOWER が終了したことを踏まえると、これは特筆することとして称賛された。

今後は、分布解析や資源量推定における課題について、(1) モデルの選択、(2) 追加分散、(3) 空間モデリング、(4) $g(0)$ に関するテレメトリー潜水時間データの分析であることが確認された。

系群構造・資源量とそのトレンド、生物学的な環境データを統合して解析するためには、IWC が評価に用いているようなモデリングのフレームワークを開発することが理想的であること等が解説された。しかし、このモデリング手法は実現性に限界があるため、最終的なレビューでは、系群構造により定義された資源量を推定する計画であることが説明された。また、解析上、生物学的パラメーターに基づく「時点ごとの基準点」を設定する重要性も確認された。

二次的目的とその他に関する研究の進捗状況

二次的目的の研究

南極海における海洋観測データの研究では、1990 年代から 2020 年代にかけて南極海の温暖化傾向が示唆された (RW/25/JS18)。今後の解析については、海洋環境と生態系プロセスを結びつけ、鯨類の分布や個体群動態の要因解明を進めるように助言を受けた。

南緯 60 度以南のマリンデブリの研究では、1987/88-2022/23 年度の間で計 175 個が発見され、経年的な増加が認められたが、他の海域よりも密度がはるかに少ないことが報告された (RW/25/JS19)。議論では、マリンデブリに関する膨大なデータセットが歓迎され、関連する国内外の組織や機関への情報共有の重要

性が説かれた。

ミナミセミクジラの遺伝的マーキング・再捕獲法を用いた資源量推定では、1,307 個体 (95% CI: 661, 2,582) と推定され (RW/25/JS20)、近親個体標識再捕獲法による資源量推定値に関する研究ではモデル自体の識別性の問題により、不正確かつ不安定な推定値が導き出されることが報告された (RW/25/JS21)。議論では、生存率や成長率について外部情報の推定値の使用を検討すること等、解析上の技術的な点が話し合われた。

安定同位体比を用いた鯨類の摂食生態に関する研究では、ヒゲクジラ類でナンキョクオキアミが主要な餌であることが示されたが、ミナミセミクジラでは主にオーストラリア沿岸に生息する複数種のオキアミ類を捕食していたことが示唆された (RW/25/JS22)。今後の解析では、結果を解釈する際にはタイムラグを考慮する必要があること、そして、オーストラリア沿岸のオキアミ類についても、今後の分析に加えることが推奨された。

ドローンに関する取り組みでは、空撮によるクジラのデータ収集（体長・プロポーシオン測定、群れサイズの確認等）の状況等が報告された (RW/25/JS23) (写真 2)。また、空撮により撮影されたシロナガスクジラの写真測量の研究では、体長等の推定結果が示された (RW/25/JS24)。議論では、調査上、ドローンはあくまでも補完的な手段として捉えるべきであることの見解が述べられた。今後は、写真測量について捕獲個体データを使用したキャリブレーションの有用性が説かれ、推定体積を用いた解析の検討についても提案が行われた。



写真 2. 研究発表の様子。

その他に関する研究

JASS-A で観察されたナガスクジラの摂食行動 (RW/25/JS25)、メガネイルカ (RW/25/JS26)、コセミクジラ (RW/25/JS27) の観察に関する研究が報告された。また、南極海のザトウクジラ表皮とその生息環境の微生物叢に関する新たな研究 (RW/25/JS28) とシャチ 4 頭についてミトコンドリア DNA からエコタイプの同定を試みた結果についても報告がなされた (RW/25/JS29)。

二次的目的とその他の研究－研究の評価と提言

JASS-A によって得られた体系的なデータ（海洋環境やマリンデブリ等）や、二次的目的に関する研究や分析手法の検討は貴重な情報を提供しているとして、高く評価された。そして、それらの情報を国内外の関連機関に共有することは、JASS-A を推進する上で重要であることが説明された。

国際的な研究協力

JASS-A が国外の科学者に研究への参加機会、特に調査航海への参加や専門知識の交換の場を提供していることが認められた。議論では、遺伝学的データ、自然標識写真データや技術開発等について国際協力の重要性が強調され、実際の取り組みや既存の協力関係が強い支持を得た。そして、JASS-A の目的を達成する上でこの協力関係は相互に有益であることから継続・拡大について合意がなされた。さらに、海外と共通の課題について知見・情報を交換することが奨励された。

研究成果の普及

JASS-A の研究水準の高さを踏まえ、より多様な方法で研究成果を普及させることの重要性が強調された。そして、国際会議と連携し南極海研究に特化したワークショップの開催を検討するように勧められた。また、JASS-A の継続意義を国内に広く理解してもらうための広報活動も有用であり、専門家に意見を求めること、ソーシャルメディアの活用すること、公共／学術機関での講演を通じて地域社会に成果を発信することの重要性も確認された。

おわりに

今回のワークショップでは、各研究分野の第一人者である海外招待科学者と日本側の科学者の間で闊達且つ深い議論が行われ、調査・研究への適切な評価と重要で有意義な提言を得ることができた。議論では、鯨類を中心とした南極海生態系が変化を続けていることを示唆する研究結果が強く支持されるとともに、JASS-A による継続的且つ一貫した南極海生態系のモニタリングの重要性と必要性が確認され、高い評価を受けた（これは 1978/79 年度から開始された IDCR-SOWER を含め、ブレずに一貫した目視調査を継続してきた事が高く評価されたものであり、先人の努力の賜物である）。さらに、南極海の包括的な鯨類資源管理を行うために、現時点で調査対象外の海域（南極海第 I 区・第 II 区ならびに南緯 60 度以北の海域）で一貫性のある調査の実施による南極海の鯨類モニタリングの継続が強く奨励された。

本ワークショップの結果は、第 32 回 NAMMCO SC 会合（2026 年 1 月開催）（ICR, 2026a）と第 70 回 IWC SC 会合（2026 年 4-5 月開催）（ICR, 2026b）に提出され、両会合において情報提供への感謝とともに、プロジェクトの継続への期待が示された。2026 年度 CCAMLR-EMM 会合（6-7 月開催）（ICR, 2026c）でも報告予定である。

現在、本ワークショップでの提言を踏まえ、2026/27 年度以降の調査を具体化するための検討がすでに始まっている。過去の日本の鯨類調査を継承し進展させた JASS-A は、その規模と継続性・一貫性において日本のみが実行できる世界に類を見ない非致死的な調査研究活動である。鯨類資源の宝庫と言われる南極海において鯨類の状況を逐次、モニタリングしていくことは、適切な資源管理において欠くべからぬものであり、その役割を果たすことができる JASS-A は、今後もさらなる発展が必要である。

謝辞

JASS-A に参加した調査員・乗組員、本ワークショップに研究を報告し議論に参加した科学者、そして国外の招待科学者の各位に感謝申し上げます。また、本稿の作成に当たり、有益なコメントをいただいた日本鯨類研究所の松岡耕二理事、第一研究部門資源分類研究室 田口美緒子室長、杉本太郎主任研究員、資源量推定研究室 勝俣太貴主任研究員、そして、ルイス A. パステネ科学アドバイザーに深謝する。

引用文献

- Government of Japan. 2019a. Outline of a research program to investigate the abundance, abundance trends and stock structure of large whales in the Indo-Pacific region of the Antarctic, including a survey plan for the 2019/20 austral summer season. Paper SC/68a/ASI8 presented to the IWC Scientific Committee, May 2019 (unpublished). 16pp.
- Government of Japan. 2019b. Outline of a research program to investigate the abundance, abundance trends and stock structure of large whales in the Indo-Pacific region of the Antarctic, including a survey plan for the 2019/20 austral summer season. Paper WG-EMM-2019/68 presented to CCAMLR meeting of Working Group on Ecosystem Monitoring and Management, June-July 2019 (unpublished). 16pp.
- Government of Japan. 2019c. Outline of a research program to investigate the abundance, abundance trends and stock structure of large whales in the Indo-Pacific region of the Antarctic, including a survey plan for the 2019/20 austral summer season (revised version of document SC/68a/ASI08 presented to the IWC SC 2019 meeting). Paper SC/26/NPR-JP presented to the 26th meeting of the NAMMCO Scientific Committee, October-November 2019 (unpublished). 16pp.
- Institute of Cetacean Research. 2026a. Report of the Mid-Term Review Workshop of the Japanese Abundance and Stock structure Surveys in the Antarctic (JASS-A Research Programme). Paper SC/32/FI35 presented to the 32nd meeting of the NAMMCO Scientific Committee, January 2026 (unpublished). 29pp.
- Institute of Cetacean Research. 2026b. Report of the Mid-Term Review Workshop of the Japanese Abundance and Stock structure Surveys in the Antarctic (JASS-A Research Programme). Paper SC/70/O/20 presented to the IWC Scientific Committee, April-May 2026 (unpublished). 29pp.
- Institute of Cetacean Research. 2026c. Report of the Mid-Term Review Workshop of the Japanese Abundance and Stock structure Surveys in the Antarctic (JASS-A Research Programme). Paper WG-EMM-2026/72 presented to CCAMLR meeting of Working Group on Ecosystem Monitoring and Management, Jun-July 2026 (unpublished). 29pp.

付録

南極海鯨類資源調査（JASS-A）中間レビューワークショップ提出文書

- Førland, B., Skaug, H. J., Takahashi, M. and Pastene, L. A. Close-kin mark-recapture without age information: application to southern right whales (published study). 26pp. RW/25/JS21.
- Goto, M., Taguchi, M., Sugimoto, T., Matsuoka, K. and Pastene, L. A. An update of the genetic study on spatial and temporal stock structure of humpback whales in the Antarctic feeding grounds. 18pp. RW/25/JS8.
- Isoda, T., Katsumata, T., Matsuoka, K. and Pastene L. A. The Japanese Abundance and Stock structure Surveys in the Antarctic (JASS-A): origin, objectives, and research activities in the period 2019/20-2024/25. 26pp. RW/25/JS1.
- Isoda, T., Katsumata, T., Hakamada, T. and Matsuoka, K. Spatial and temporal distribution of Antarctic minke, humpback, fin, Antarctic blue and southern right whales in Areas III-VI, south of 60° S, based on JARPA, JARPAII, NEWREP-A and JASS-A sighting data. 17pp. RW/25/JS3.

- Isoda, T., Katsumata, T. and Matsuoka, K. Summary of photo-identification information of Antarctic blue, southern right, and humpback whales collected by JARPA, JARPAII, NEWREP-A, and JASS-A. 11pp. RW/25/JS10.
- Isoda, T., Matsuoka, K., Tamura, T. and Pastene, L. A. Spatial and temporal distribution of floating marine macro debris in the Indo-Pacific region of the Antarctic (published study). 16pp. RW/25/JS19.
- Isoda, T., Murillo-Herrera, A. I., Moraga, C. A., Pastene, L. A. and Souza, V. Microbiota of humpback whales and its environment far and near the pack-ice in the Indo sector of the Antarctic. 10pp. RW/25/JS28.
- Kanda, N., Murase, H. and Katsumata, T. A preliminary attempt to identify ecotypes of killer whales observed in a part of the JASS-A survey area (130-145° W) using a short sequence of the mitochondrial ND3 gene. 9pp. RW/25/JS29.
- Kiemel, K., Taguchi, M., Tiedemann, R. and Pastene, L. A. Preliminary genetic analysis on stock structure of Antarctic blue whales in the Antarctic feeding grounds based on SNPs. 7pp. RW/25/JS12.
- Kim, Y., Katsumata, T., Isoda, T. and Matsuoka, K. Rare sightings of the pygmy right whale (*Caperea marginata*) during the 2022/2023 JASS-A cruise in the Southwestern Pacific (published study). 12pp. RW/25/JS27.
- Katsumata, T. and Isoda, T. Long-term track movement of Antarctic minke and fin whales revealed by satellite-monitored tags. 10pp. RW/25/JS4.
- Katsumata, T., Hakamada, T. and Matsuoka, K. Estimates of abundance and their trend of Antarctic blue, fin, Antarctic minke and humpback whales in Areas III-VI, south of 60° S, based on NEWREP-A and JASS-A sighting data (2014/15-2022/23) and $g(0)=1$. 39pp. RW/25/JS5.
- Katsumata, T., Murata, H., Hakamada, T. and Matsuoka, K. Preliminary estimate of $g(0)$ for Antarctic minke, humpback and fin whales. 11pp. RW/25/JS6.
- Katsumata, T., Isoda, T. and Matsuoka, K. Utility of data logging for the estimation of availability bias in sighting surveys (published study). 5pp. RW/25/JS7.
- Katsumata, T., Hakamada, T. and Matsuoka, K. Estimates of abundance and abundance trend of southern right whales in Area IV, south of 60° S, based on NEWREP-A sighting data. 8pp. RW/25/JS15.
- Katsumata, T., Izumiya, E. and Murase, H. Progress report of Antarctic blue whale photogrammetry study. 6pp. RW/25/JS24.
- Katsumata, T., Isoda, T., Matsuno, K., Murase, H. and Matsuoka, K. Observation of fin whale (*Balaenoptera physalus*) feeding behavior in the austral summer Southern Hemisphere mid-latitudes (published study). 6pp. RW/25/JS25.
- Katsumata, T. and Isoda, T. Observations of a spectacled porpoise (*Phocoena dioptrica*) from a drone (in review in *CPOPS*). 11pp. RW/25/JS26.
- Matsuoka, K., Katsumata, T. and Isoda, T. Distribution of toothed whales in Areas III-VI based on JARPA, JARPAII, NEWREP-A and JASS-A sighting data. 7pp. RW/25/JS16.
- Matsuoka, K., Yoshida, T., Katsumata, T. and Isoda, T. Progress in UAV applications to complement ship-based cetacean sighting surveys. 8pp. RW/25/JS23.

- Murata, H., Katsumata, T., Matsuoka, K. and Hakamada, T. Estimates of abundance and their trend for large-toothed and killer whales in Areas III-VI, south of 60° S, based on NEWREP-A and JASS-A sighting data and assuming $g(0)=1$. 24pp. RW/25/JS17.
- Sugimoto, T. and Taguchi, M. An update of the genetic analysis on stock structure of Antarctic minke whales in the Antarctic feeding grounds based on mitochondrial and microsatellite DNA. 11pp. RW/25/JS2.
- Sugimoto, T. and Taguchi, M. Preliminary genetic analysis on stock structure of southern right whales in the Antarctic feeding grounds based on mitochondrial and microsatellite DNA. 10pp. RW/25/JS13.
- Taguchi, M. and Sugimoto, T. Preliminary genetic analysis on stock structure of fin whales in the Antarctic feeding grounds based on mitochondrial and microsatellite DNA. 14pp. RW/25/JS11.
- Takahashi, M., Førlund, B., Pastene, L. A. and Skaug, H. J. Geographical distribution of close kin in southern right whales on feeding grounds (published study). 20pp. RW/25/JS14.
- Takahashi, M., Hakamada, T., Matsuoka, K. and Pastene, L. A. Abundance of southern right whales in the Indo sector of the Antarctic using microsatellite genotyping and mark-recapture. 14pp. RW/25/JS20.
- Tamura, T. Feeding habits and interactions among whale species in Antarctic Ocean inferred from stable isotope analysis. 17pp. RW/25/JS22.
- Yamazaki, K., Isoda, T., Matsuoka, K. and Murase, H. Reconstructing pre-Argo state of the East Antarctic margin with legacy fishery survey hydrography: preliminary results. 11pp. RW/25/JS18.



写真. 海水域を航行する第三勇新丸 (2025/26 年度 JASS-A)

母船式捕鯨業における2025年度生物調査

久野 友愛（日本鯨類研究所・調査センター）

はじめに

2025 年は、商業捕鯨再開から 7 年目を迎えニタリクジラ、イワシクジラの捕獲枠が改定され、母船式捕鯨業における捕獲上限枠は、ニタリクジラ 143 頭（水産庁留保分 20 頭、および基地式からの譲渡 10 頭を含む）、イワシクジラ 56 頭、そしてナガスクジラ 60 頭と設定されました。

捕鯨母船「関鯨丸」船団は 4 月から 11 月にかけて長期操業を実施し、このうち 4 月から 5 月においては、かつての商業捕鯨時代以来、実に数十年ぶりとなる春季のオホーツク海においてナガスクジラ 25 頭を捕獲しました。捕鯨母船での生物調査では、捕獲された鯨体について、体長、体重、脂皮厚、繁殖状態、胃内容物など各種生物情報の確認および標本採集を実施しました。特にナガスクジラの個体は、限られた時間の中で多くの調査項目を処理する必要があるため、迅速な作業が求められます。

本報では、2025 年度母船式操業における生物調査の概要と、当年の鯨類分布状況および摂餌状況について報告します。

オホーツク海から操業開始

就航 2 年目を迎えた関鯨丸船団は、4 月 21 日に山口県下関港を出港しました。2025 年度は、春季のオホーツク海におけるナガスクジラ操業から開始され、本海域におけるナガスクジラの捕獲は過去の商業捕鯨以来となりました。

全航海は 4 次操業に区分され、1 次操業（25-1W）ではオホーツク海におけるナガスクジラ操業、2 次操業（25-2W）では房総沖から常磐沖にかけてニタリクジラ操業を実施しました。（表 1、付図参照）。

3 次操業（25-3W）では、水産庁留保分 20 頭に加え、基地式捕鯨から 10 頭分の捕獲枠が譲渡されたことにより、ニタリクジラの捕獲枠は 143 頭となりました。8 月以降、仙台沖ではニタリクジラの高密度海域が形成され、9 月 20 日に捕獲枠 143 頭を達成しました。以降は、秋季のイワシクジラおよびナガスクジラを主対象とした操業へ移行しました。しかし秋季の 4 次操業（25-4W）では荒天による休漁が続き、イワシクジラは捕獲枠 56 頭に対し 35 頭で終了しました。一方、ナガスクジラは操業終了までに捕獲枠 60 頭を達成しました。11 月 27 日に船団は北海道苫小牧港へ入港し、2025 年度の生物調査を終了しました。以下に、各捕獲対象種の操業について紹介します。

表 1. 2025 年度操業の概要。

航海期間	2025 年 4 月 21 日～11 月 27 日		合計 195 日間
船団	母船	関鯨丸	：9,299 トン
	捕鯨船	第三勇新丸	：742 トン
		勇新丸	：724 トン
捕獲頭数	ニタリクジラ（143 頭）、イワシクジラ（35 頭）、ナガスクジラ（60 頭）		
操業概要	1 次	25-1W	4 月 21 日（下関港）～ 6 月 2 日（仙台港）
	2 次	25-2W	6 月 7 日（仙台港）～ 7 月 28 日（下関港）
	3 次	25-3W	8 月 15 日（下関港）～ 10 月 5 日（仙台港）
	4 次	25-4W	10 月 11 日（仙台港）～ 11 月 27 日（苫小牧港）

ニタリクジラ操業

ニタリクジラ操業は2次操業より開始しました。例年は、三陸沖から道東沖にかけて黒潮由来の暖水域と親潮由来の冷水域との境界域が形成され、本種の高密度海域が形成される傾向がみられていました。しかし、2025年は約7年9か月続いた黒潮大蛇行の終息後、黒潮本流が仙台沖付近で東進（黒潮統流）し、北側に顕著な暖水域は形成されませんでした。

6月から7月にかけては、黒潮本流および黒潮統流に沿って探索を実施しましたが、高密度海域は形成されておらず、海況悪化や視界不良も重なったことから、EEZに沿った南北方向の探索を継続しました。また、2次操業開始直後には母船推進器の片側に不具合が発生し、船速および長距離移動に一定の制限が生じました。このため、6月30日から7月1日にかけては修理のため途中入港を行うとともに、探索範囲も例年より限定的となりました。8月以降は仙台湾沖に本種の高密度海域が形成され、東西方向の探索を行いながら捕獲は順調に継続し、9月20日に143頭の捕獲をもって操業を終了しました。

捕獲にあたっては推定体長12.2m以上の個体を対象とした他、高密度海域では体型（太り具合）も考慮しましたが、実際には12.2m以下の個体も捕獲しました。雌雄比はオス56頭(39%)に対しメス87頭(61%)とメスの割合が高く、雌雄ともに成熟個体が卓越しました（図1）。また、6月から7月は分布密度が低かったことから、小型個体も含め幅広い体長範囲の個体が捕獲されました（図2）。

捕獲したニタリクジラの胃内容物は、本年度もオキアミ類が主体であり、商業捕鯨再開以降の傾向に大きな変化は認められませんでした。

魚類ではサバ属魚類の出現が最も多く、マイワシも一部の個体で確認されました。一方、近年比較的多く出現していたカタクチイワシはごくわずかでした。魚類組成には年による違いがみられ、その年の餌環境を反映している可能性が考えられました。

イワシクジラ操業

7月はニタリクジラ操業の合間に、イワシクジラの探索および捕獲も実施しました。夏季の道東南部海域では、親潮由来の冷水域と黒潮統流由来の暖水域との境界域が形成され、このような狭い水温境界付近にイワシクジラが分布する傾向が、これまでの捕獲操業から予想されていました。しかし、当該海域を中心に探索を行ったものの、本種の分布は散発的でした。また、秋季の操業では、2019年商業捕鯨再開以降、本種は親潮第一分枝および第二分枝が道東周辺海域へ西進する時期に来遊する傾向が確認されていました。このため、9月より本格的な本種の操業を開始しましたが、2025年は親潮第一分枝および第二分枝の西進がともに遅れ、11月まで顕著な低温域は形成されませんでした。10月後半になって徐々に低温域が形成された後も、本種は冷水域内部まで来遊せず、親潮由来の冷水域の一部に散見されるのみでした。海況図には徐々に低温域が現れ始めていたものの、期待したような高密度海域は形成されず、その後、11月に入りようやく親潮第一分枝が道東周辺海域に差し込んだことにより、イワシクジラの発見数は増加しましたが、高密度海域は形成されず、35頭の捕獲をもって終了しました。

胃内容物では、カイアシ類が主要餌として確認されたほか、端脚類（ヨコエビの仲間）も確認され、これは当研究所が1994年から行ってきました北西太平洋での鯨類捕獲調査及び2019年からの商業捕鯨以来初めてとなります（図3、4）。一方で、空胃個体が過半数を占めており、本年のイワシクジラを取り巻く餌環境は、例年とは異なっていた可能性が考えられました。

ナガスクジラ操業

4月から5月にかけて、数十年ぶりとなるオホーツク海における本種の操業を実施しました。同海では、様々な漁業および養殖業が行われていることから、操業に際しては、水産庁指導の下に、地元漁業関係者と入念な調整を行い、水産業への影響が生じないように操業海域を設定しました。操業は、運用上の理由から、主として網走沖の北見大和堆東側海域を中心に実施されました。当該海域では、海底水深 2,000m 前後の海域においてナガスクジラの発見が継続してみられました。一方、西側海域においても探索を実施し発見は確認されたものの、東側海域と比較すると分布密度は低い傾向にみえました。（付図 4-5 月参照）

9月からは道東周辺海域において再び本格的な本種の操業を開始しました。9月は表層水温 15℃ 前後の状態が続いていましたが、10月後半になると親潮第一分枝由来の冷水域が道東沖へ差し込み、海表水温は 10℃ 前後まで低下しました。これに伴い、冷水域内部ではナガスクジラが高密度で分布する状況が確認されました。10月後半になって海況が変化すると、それまで散発的だった発見が一気に増加したのです。一方で、11月に入り水温がさらに低下すると、ナガスクジラの分布密度は次第に低下し、冷水域縁辺部に散見される状況となりました（付図 9 月以降参照）。

胃内容物については、主要餌は例年通りオキアミ類でしたが、2024年には満胃個体が確認されたのに対し、2025年は春季オホーツク海および秋季太平洋ともに胃内容物充満度の低い個体が多く確認されました。また、オホーツク海で捕獲された一部の個体では、オキアミ類に加え、偶発的に混入したと考えられる、ニンシン、スケトウダラ、トガリイチモンジイワシなどの魚類も確認されました（図 6）。

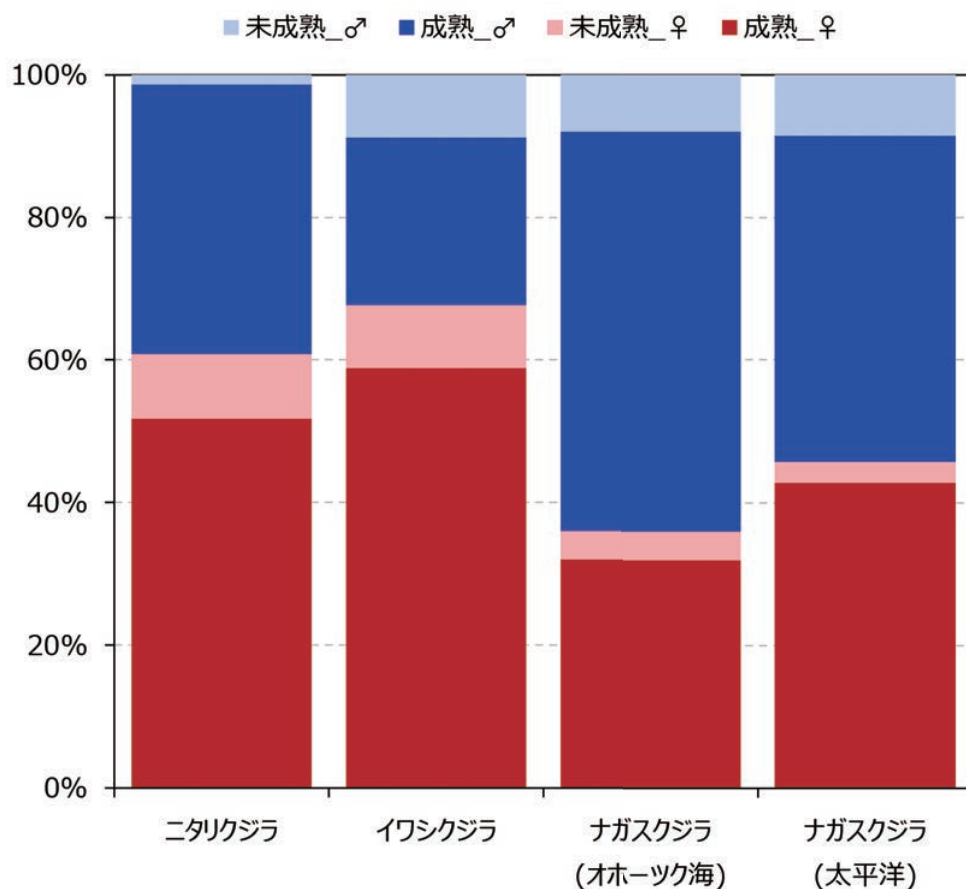


図 1. 2025 年度操業において捕獲した 3 鯨種の性状態組成。

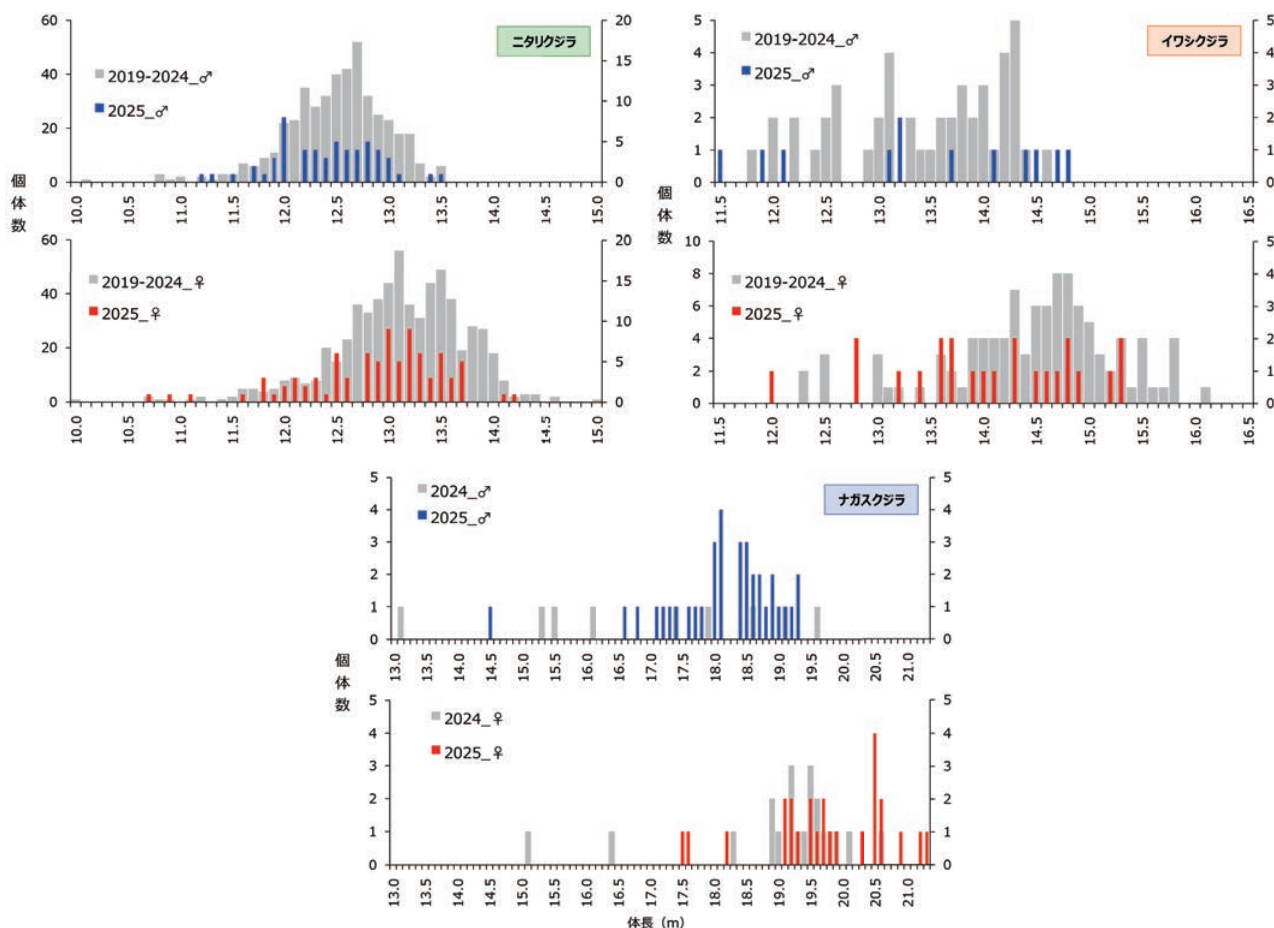


図2. 2019-2024年度および2025年度の商業捕鯨において捕獲されたニタリクジラ(左上)、イワシクジラ(右上)、ナガスクジラ(下)の体長組成。

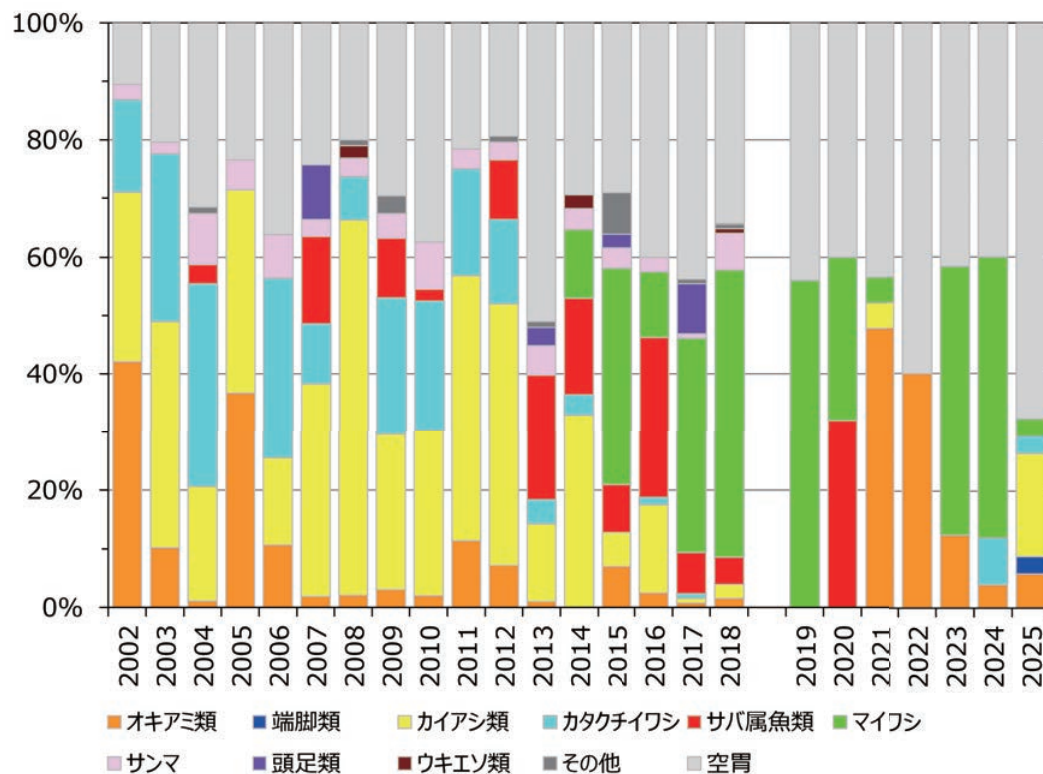


図3. イワシクジラの年別胃内容物組成。

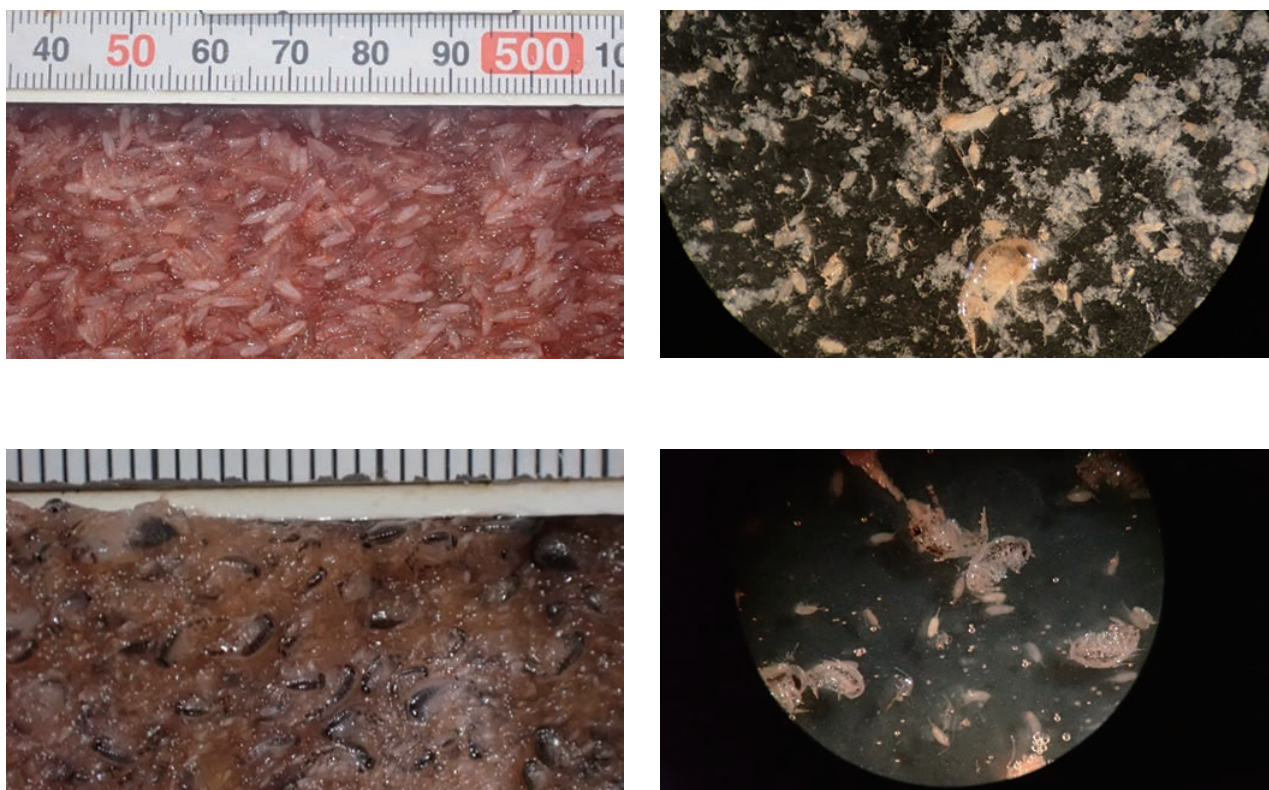


図4. イワシクジラの胃内容物から出現したカイアシ類（上）と端脚類（下）。

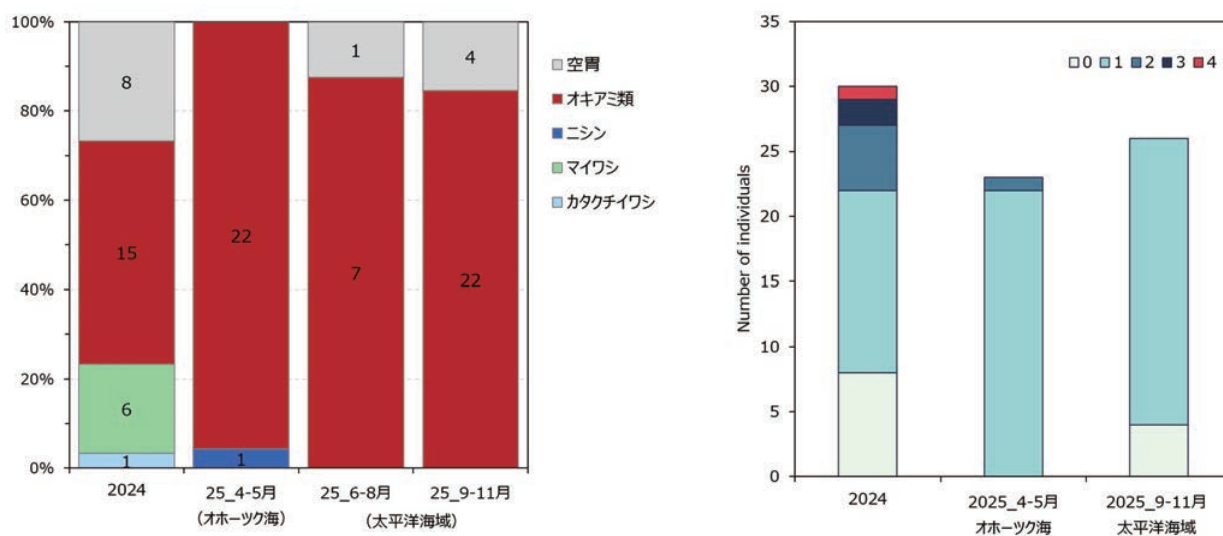


図5. ナガスクジラの時期別胃内容物組成（左）と、その胃内容物充満度組成（右）。胃内容物充満度は、胃内容物量の目視観察より5段階（0：空胃 0%、1：少ない 1～24%、2：やや有り 25～49%、3：多い 50～74%、4：満胃 75～100%）で区分した。



図6. オホーツク海において捕獲されたナガスクジラの胃内容物から出現した餌生物（一部）。オキアミ類に混在していたトガリイチモンジイワシ（左上）、ニシン（右上）、オキアミ類に混在していたニシン（下）。

まとめ

2025年度の操業では、各鯨種の分布状況、摂餌状況、および海洋環境において、以下のような特徴が確認されました。

春季オホーツク海のナガスクジラ操業

オキアミ類に加え、偶発的に混入したと考えられるとはいえ、ニシン、スケトウダラ、トガリイチモンジイワシなど、太平洋海域とは異なる餌生物が確認されました。また、オキアミ類と混在して出現したトガリイチモンジイワシは、漁獲対象種ではないものの、サケマス類やニシン類の餌資源としてオホーツク海生態系を支える重要種の一つとされています。これらの結果は、オホーツク海におけるナガスクジラの摂餌生態と地域生態系の構造を理解するうえで、貴重な知見になると考えられます。

各鯨種の分布状況

夏季においては、例年は黒潮由来の暖水塊が岩手沖から青森沖および道東沖にかけて停滞する傾向がみられていたのに対し、2025年は暖水塊が主に仙台沖から東進する傾向にありました。操業範囲が仙台沖周辺に偏っている点に加え、航行性能上の制約により探索範囲が限定されていた可能性を考慮する必要はあるものの、ニタリクジラの発見および捕獲は、長期間にわたり仙台沖の比較的限定された海域に集中していました。また、秋季には親潮第一分枝由来の冷水塊の道東沖への差し込みが弱く、第二分枝の西進も顕

著ではありませんでした。この時期、イワシクジラの来遊は極めて少なく、捕獲頭数も捕獲枠上限には達していませんでした。また、本年の秋季操業ではザトウクジラの発見も非常に多く、海域によってはナガスクジラとは対照的な分布傾向がみられました。これらの分布傾向が、海洋環境や餌環境とどのように関連しているかについては、今後さらに検討が必要と考えられます。

摂餌状況

イワシクジラでは、主要餌生物としてカイアシ類および端脚類が確認されるとともに、過去6年間で最も空胃個体の割合が高い年となりました。また、ナガスクジラについても、捕獲時刻による摂餌量の差を考慮する必要があるものの、2025年度は胃内容充満度の低い個体が大半を占めました。

海洋環境

2025年は、近年継続していた黒潮流路にも変化が認められていることから、「いつもの海」とは異なる鯨の分布や摂餌状況が確認されました。2025年に認められた各鯨種の分布状況や摂餌状況の変化が、黒潮流路の変動とどのように関連していたかについては、今後さらに慎重な検討が必要です。今後は、生物調査によって得られた分布、食性、繁殖に関する情報に加え、海洋環境データや餌生物資源量などを統合的に解析することにより、鯨類を含む海洋生態系全体への理解を深める必要があります。

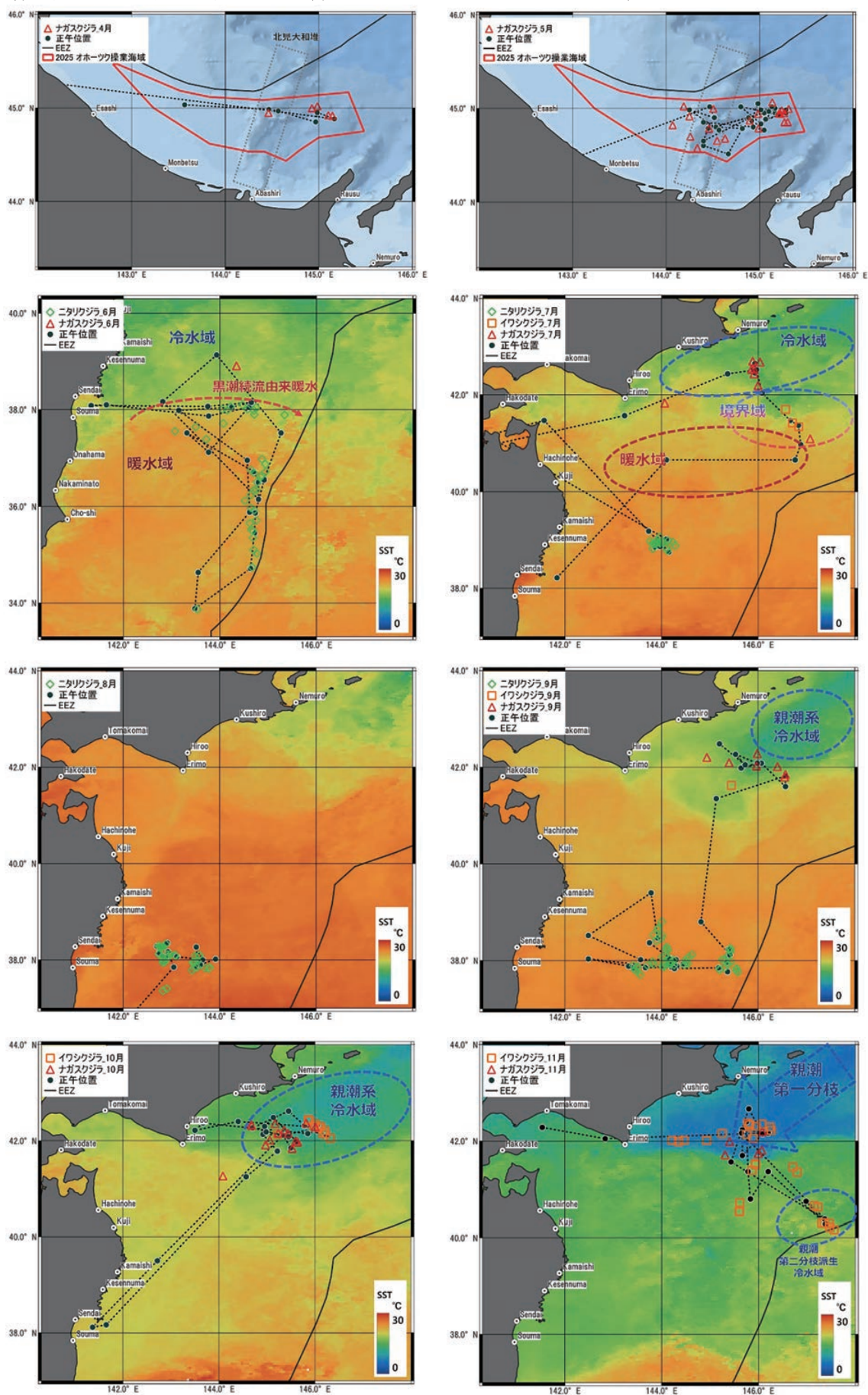
最後に、本操業にあたってご指導いただいた水産庁や共同船舶をはじめとする関係当局の方々、生物調査において、推進器不具合や船内電源トラブルなど様々な困難がある中でも、多大なご協力をいただいた「関鯨丸」、および荒天下においてもクジラの探索を継続した「勇新丸」「第三勇新丸」の乗組員ならびに関係者の皆様に、心からの敬意と深い感謝を申し上げます。



図7. オホーツク海で確認されたナガスクジラ（上）と船上での生物調査風景（下）。

付図

月別の各鯨種の発見位置と船団の航跡（水温図の出典：Nasa Ocean Colore）。



日本鯨類研究所太地事務所・図書室の紹介

大藪 恭久（日本鯨類研究所・図書広報室）

はじめに

黒潮流れる、暖かい気候に恵まれた熊野灘の沿岸地域に属している古式捕鯨発祥の地・和歌山県太地町は、人口約 2,800 人と小さな町ですが、町内の至るところに鯨と関わりのある史跡が数多く点在しており、400 年以上前より「鯨の町」として、鯨とともに発展してきました。現在もイルカやゴンドウのような小型鯨類の追い込み漁を主流として行っている他、それらの生体展示や町の歴史、鯨の生態や捕鯨史に関する展示を取り扱う町立くじらの博物館も人気を博しています。2024 年 4 月、太平洋を一望できる梶取崎の近くに新たに建設された「国際鯨類施設（以下、本施設）」が開館しました。本施設は、太地町の鯨の学術研究都市計画の一環の中で、世界各地の研究者が集まり研究を行う拠点地として計画されてきました。この施設内に当研究所の太地事務所が開所し 3 年目を迎えます。本施設の開館、太地事務所の開所も大きな出来事ではありましたが、再開した図書室も注目していただきたいポイントであります。当室は、日本の鯨類に関する書籍・雑誌を所蔵しているのはもちろん、戦前からのノルウェーの捕鯨雑誌シリーズ、英国ディスカバリーレポート全集、日本のみならず英語圏、ロシア、中国、韓国といった世界各地の書籍・雑誌など鯨類の資源研究や捕鯨産業関連蔵書といった日本鯨類研究所図書室でしか見ることのできない数多くの資料を保有する国内で唯一の「鯨の専門図書室」です。本稿では、3 年目を迎えた本施設、日本鯨類研究所太地事務所（以下、太地事務所）と同研究所図書室について詳しく紹介します。

国際鯨類施設・日本鯨類研究所太地事務所の開館

2024 年 4 月に開館された本施設そして、太地事務所は、紀州産木材とガラスを基調とした特徴的な施設で、周辺は草木が生い茂り、施設前の広大な草地には野鳥や鹿などの野生動物を間近で観察できる、自然豊かな施設です（写真 1、2）。施設に入ると、まずエントランスホールでクロミンククジラの頭部模型が迎えてくれます。同ホールでは、この他にも、何点か常設展示があり、2025 年の夏に子供向けの夏休みイベントを開催し、通常の展示に加えていくつかの体験型の展示を行い、来場者から好評を得ることができました。

このホール以外に、3 種類に分けられた会議室（6 名、9 名、14 名）（写真 3、4、5）、90 名を収容できる研修ホールといった設備が備わっています（写真 6）。こちらの会議室、研修ホールを含む本施設は、指定管理者として当研究所が太地町より委託管理を一任されています。設備の詳細は、当研究所の HP でもご覧いただけます。またご利用の際は、事前予約制となりますので太地事務所までお問い合わせください。

太地事務所の開所を機に、元々あった東京、そして太地との 2 拠点運営が開始されました。太地事務所には遺伝解析室、化学分析室、組織学検査室、生物解析室の 4 つの研究室と、生物標本などを保管する標本保管室、解体作業のような大掛かりな作業をするためのウェットラボ、事務局・研究者用の各事務室が備わっています。太地事務所が開所されたことにより、これまで当研究所が行ってきた海洋での研究・調査以外で、太地町の団体と協力し、様々な研究・調査を行うことによる、活動の範囲が広がり、貴重な情報を収集することも可能になりました。



写真 1. 国際鯨類施設外観。



写真 2. 上空より見た国際鯨類施設。



写真 3. 会議室 1。



写真 4. 会議室 2。



写真 5. 会議室 3。



写真 6. 研修ホール。

国際鯨類施設、太地事務所での活動

開館して以降の2年間、本施設では様々なイベントを開催してきました。その中で、当研究所が主体として開催したイベントをいくつか紹介します。

全国鯨フォーラム2024 in 太地 エクスカーション

2024年11月2日に太地町にて、全国鯨フォーラムが開催されました(図1)。同フォーラムは「捕鯨文化」「鯨食文化」「捕鯨業」への理解を深めるとともに、全国に広く存在する鯨と縁のある地域・文化を発信していくことを目的として、2002年～2006年に開催された「日本伝統捕鯨地域サミット」を継承したイベントであり、2007年より毎年鯨に縁のある地方自治体で開催されてきました。2022年及び2023年は、新型コロナウイルス感染予防の影響により中止を余儀なくされましたが、2024年に感染予防の緩和により約3年ぶりに開催することができました。

本フォーラムは、11月2日に基調講演とパネルディスカッションを行い、その後懇親会を開会し全国の鯨・捕鯨業界の方々が親睦をより一層深めた時間となりました。そして翌日にエクスカーションを行い、太地町内にある鯨の関連施設・史跡などを巡るツアーが組まれました。

このエクスカーションのツアーには、開館1年目の本施設も含まれており、太地・東京事務所役職員が協力して、関係者をおもてなしました。施設全体の紹介、当研究所の活動内容や研究・調査関連の紹介をし、ツアー参加者たちに当研究所について再度理解と認識を深めていただく機会となりました。

また、当研究所藤瀬良弘理事長からの提案で、これまで太地町民に対して本施設の紹介を行っていなかったため、この際に町民の方に認知していただくという運びになり、関係者の方が施設を去ったのち、町民の方への一般公開を行いました。こちらの一般公開もエクスカーションツアーと同様の紹介を行い、普段公開をしていない太地事務所内も公開しました。

エクスカーション当日は、本来なら太地くじら祭りが実施される予定でしたが、悪天候のため残念ながら祭りは中止となりました。当研究所は太地くじら祭りでの鯨料理の試食を急遽変更して、ツアー参加者並びに本施設を訪れた方々に鯨料理を試食してもらい、鯨の美味しさを改めて実感してもらいました。

これらイベントは、開館して以降初めての大きなイベントでした。本施設にてとって今後のイベント開催のための土台作りとなり、施設のPR、研究者から一般の方々に対する研究発表を含め、大変有意義なイベントとなりました。

夏休みイベント国際鯨類施設特別企画「クジラ博士になろう！」

2025年7月29日～8月10日に本施設にて特別企画「クジラ博士になろう！」を行いました(図2)。これまでの当研究所主催で行った子供向けイベントとしては、規模の大きなイベントとなりました。

当研究所の太地事務所内、会議室1・2以外の施設内すべてが展示会場となり、子供から大人まで家族で楽しめる展示をそれぞれの会場に配置したので、紹介していきます。



図1. 全国鯨フォーラム 2024in 太地
開催ポスター。

エントランスホールでは、常設展示のクロミンククジラ頭部模型のほか、ニタリクジラの実寸大幕、太地町立くじらの博物館で生体展示しているハナゴンドウ及びコビレゴンドウの実寸大幕、子供から人気のあるミンククジラのパルーン、一部地域で見ることのできる鯨のぼり、スジイルカの骨格標本と鯨の生態・捕鯨に関するパネルといった本展でしか見ることが出来ない展示が来館者を迎えました。

このほか、体験型イベントとして、当研究所主催イベントでよく登場するスタンプラリー、くじら絵合わせパズルのほか、今回のイベントから初めて展示したクジラが遊泳している姿をVRで体験していただくコーナーや開催期間中の7月31日と8月1日限定で開催したくじらカルタを使用したカルタ大会といった、子供から大人まで体験をしながら鯨について楽しく学べる展示を行い、好評を得ました。

エントランスホール以外の図書室や研修ホールでもイベントを行いました。図書室では、日本の鯨類研究を牽引した有名な3名の研究者を紹介する図書室企画展「クジラ博士たちの足跡」をイベント期間中と、更に図書室企画展の期間の延長を行い、土日祝を除いた8月29日まで開催しました。こちらの展示は少々大人向けの展示となっており、鯨類研究者たちの功績を主に紹介しました。また同室内の一角にて、鯨食普及の一環として鯨料理に関する書籍の展示と鯨料理レシピのパンフレット配布も行いました。

研修ホールでは、8月2、3日と8月9、10日の4日間「クジラ博士育成セミナー」と題して、当研究所の研究者たちが登壇し、実際に行っている研究・調査を子供向けにアレンジし、擬似実験の体験も含め、鯨類研究に関して深く子供たちに広める紹介を行いました。セミナー自体は、8月2、3日に「生き物としてのクジラコース」、8月9、10日に「人間とクジラの関わりコース」に分かれ講座を行い、前者のコースは「クジラの年齢を科学する」、「クジラは何を食べているのか」を、後者のコースは「クジラの頭数の数え方を学ぼう」、「クジラを減らさない方法とは」の4つのテーマに分かれセミナーを開講しました。またセミナーを開催していない期間は映像上映会を行い、当研究所が所有している鯨類調査関連の映像を主体に、子供向けに製作された鯨食普及の映像、全国の捕鯨を行っている地域を紹介した映像を上映しました。

さらに夏休みイベントを行っている期間中の7月30日に、ロシアのカムチャッカ半島にてM8.8の地震が発生し、その影響により太平洋沿岸地域に津波警報が発令され、本施設が災害時の避難場所に指定されている関係により、一時的にイベントを中止し当研究所職員及び太地町の職員で避難に来られた町民の方々の受入れを行いました。その後、警報が解除され、夕方ごろには避難者も帰宅されたことにより、翌日からはイベントを再開することができました。

本企画展を通し、全国鯨フォーラムのエクスカージョン時とは違った形で一般向けに公開されたイベントを開催できたことにより、また一つ本施設でのイベントの形を作ることができました。本企画展では、研究者や総務の職員からも多大な支援を得られたことにより無事終えることができたこと、この場を借り感謝を申し上げます。また本施設の避難場所としての機能についても経験することができ、改めて災害対策を考える良い機会ともなりました。この特別企画展の詳細は、鯨研叢書 No.18「国際鯨類施設 夏休み特別イベント『クジラ博士になろう』実施報告書」にて報告されており、当研究所のHPにも掲載されていますので、目を通していただくと幸いです。



図2. 特別企画展イベントポスター。

日本鯨類研究所図書室の歴史

ここからは当研究所図書室について説明します。これまで当図書室は、諸事情により10年以上非公開図書室として運営されてきましたが、2024年4月に晴れて公開図書室として再スタートを切ることができました。

これまでの図書室は研究所の変遷とともに形を変えてきました。まず当研究所は1941年からその前身である中部科学研究所の設立から始まります。1947年に財団法人鯨類研究所に改組され、1959年に日本捕鯨協会・鯨類研究所を経て、1987年に商業捕鯨モラトリウムを打破するための南極海におけるクロミンククジラの生物学的特性値の推定を目的とした調査を行う財団法人日本鯨類研究所が設立されました。その後、2015年に一般財団法人日本鯨類研究所に移行して今に至るわけですが、研究所の形態が様々に変化していく中で、所内の研究者が頼りにしてきた様々な書籍や雑誌はそのまま残りました。各時代に使用された資料は現在の公開図書室に引き継がれ、その書籍の中には、当研究所が財団法人鯨類研究所であった時代の「鯨研図書室」の蔵書印を確認できるものもあり、当時の面影を偲ぶことができます。

1991年に司書資格を持つ職員が入ったことにより大きく変化しました。当時の図書室は「資料倉庫といった様相で、部屋の片隅にデータ確認のための真新しいパソコンがある程度」のものだったようです。その後の様子は、鯨研通信422号「日本鯨類研究所の各部紹介（I）情報・文化部」の「3.1 図書情報課」に詳しく記載されていますので、以下に記します。

1991年からIWC京都会議が開催された1993年頃までが、現在の図書情報課の原型ができた第一変革期でした。この頃、司書の資格を持つ職員を置き本格的に資料の整備に着手しはじめ、次第に図書データベースの基礎が築かれ、本や記事情報、映像資料の整理方法が明確になっていきました。さらにその数年後、1997年から2002年頃まではIWC下関会議の開催も相まって図書室が扱う資料の範囲や事務局業務の幅が更に広がりました。情報・文化部が出来、映像資料、新聞や雑誌記事の情報量が飛躍的に伸び鯨類情報のニーズが高まったこの時期が第二の変革期ではなかったかと思います。

書籍や雑誌だけでなく、長年にわたって蓄積された記事情報や、調査研究関係の写真・動画資料が図書資料に加わりました。研究所内に鯨専門の公開図書室が置かれたのも、この第二の変革期時代となります。開室してからは、研究者のみならず鯨に関心を持つ一般の方々も図書室を利用するようになりました（写真7）。新聞、雑誌等のメディアから図書室所蔵の写真の貸出を依頼されることも増え始め、鯨に関する様々な問い合わせを受けるようになりました。また書籍を寄贈される方も多くなり、特に膨大な書籍を寄贈していただいた3名の書籍は、「島文庫」「石田文庫」「及川文庫」と寄贈者の名前を冠した文庫として図書室に設置されました。

2012年になると組織改正が行われ、図書室関係の仕事は総務部広報課に吸収されました。

また当研究所の縮小に伴い、公開図書室は閉鎖され閉架式図書室となりました。閉架式図書室になっても、メディアや一般の方々への写真貸出や問い合わせは広報課が対応して行いました。また当図書室に所蔵されている資料を閲覧したいという依頼をもらった場合は、事前に閲覧希望資料情報をお伺いし会議室等に持ってきて閲覧いただくような形をとりました。公開図書室があった時のように、外部の方々が気軽に書籍等を閲覧することはできなくなりましたが、閉架式図書室として資料保存を第一に考え、可能な範囲で閲覧していただけるよう奮闘していた時期になります。



写真7. 豊海振興ビルに移った際の図書室（右奥は田中昌一先生）。

閉架式図書室になったことで、図書室で収集してきた膨大な雑誌等の資料の保管場所を確保することが難しくなりました。その際に手を差し伸べてくださった太地町のご厚意を受け、閉架式図書室に収まりきらなかった資料を太地町旧グリーンピア南紀多目的ホールの一部屋に所蔵させていただくこととなりました。書棚の設置、書籍の配架等の作業もなかなか大変でしたが、太地町で保管できたおかげで資料を廃棄することなく、現在の公開図書室に再配架することが可能となりました。

改めて公開図書室として再開室されたことは感無量の一言に尽きます。紆余曲折を経て、はるか昔の時代に研究者たちが利用していた専門書、気軽に読める書籍、絵本、写真集や雑誌等が再び人々の目に触れ利用されることで、より一層鯨とそれに携わる人々に興味を持ってもらえればと切実に思います。図書室内は紀州材がほのかに香る木製の本棚で構築されています。静かに落ち着いて資料閲覧できる場所として利用していただければ幸いです。

2024年からの公開図書室の活動

前項では、図書室の歴史について紹介しましたが、ここからは図書室の特徴そして、再開室して以降の活動についてご紹介します。

本稿の冒頭で少し触れましたように当図書室は、全国で唯一の鯨に関する書籍・雑誌を専門的に取り扱っている図書室となっております。鯨のみならず、鯨と同じ海産哺乳類の生物に関する書籍や、鯨に関連がある魚類の書籍も取り揃えており、当図書室が使用している図書書籍管理システムにて登録されている資料数は約5万冊となります。

資料数の内訳は、書籍が約1万冊、雑誌類が約4万冊となります。普段、開架図書として閲覧可能なのが3万冊となり、残りの2万冊は、資料数と配架棚の関係上バックヤードに保管してあります。こちらについては図書室に問い合わせをしていただくと、バックヤードより図書室員がお持ちし、閲覧することが可能となります。

約5万冊のうち1万冊が書籍となり、それに合わせて分類記号が当図書室の中で最も特徴的な部分であり、まず一般図書館とは違い、独自の分類記号を設けて、書籍を分類しています。中でも、鯨に特化した分類記号を設定している部分が、一般図書館にはない大変特徴的なところではあります。また当図書室には本稿第3項でも紹介した島文庫、及川文庫、石田文庫と3つの文庫本が備わっており、同様に鯨に特化した書籍を取り揃えています。これらの分類記号に分けた際の資料数、分類記号の詳細は、以下表1、2にまとめましたのでご覧ください。

表1. 図書管理システム登録上日本鯨類研究所図書室分類記号別冊数（2026/4/1 現在）。

分類記号	A00 ～ A21	B00 ～ B21	C00 ～ C21	D00 ～ D06	E00 ～ E21
冊数	3,048	90	220	93	334

F00 ～ F20	G00 ～ G40	H00 ～ H40	J00 ～ J20	K00	L00 ～ L10
51	138	229	51	193	300

M00 ～ M30	N00 ～ N60	島文庫	石田文庫	及川文庫
553	515	1,052	627	2,700

書籍全数	雑誌全数	合計
10,194	40,149	50,343

表 2. 日本鯨類研究所図書室分類記号（詳細版）。

(一財)日本鯨類研究所図書室 分類記号一覧表		
A 鯨類及び捕鯨業	C 魚類、プランクトン及びベントスとそれらの漁業	F 医学、生物科学及び化学
A00 総記	C00 総記	F00 医学
A01 進化、発生、形態、細胞、組織、分類	C01 進化、発生、形態、細胞、組織、分類	F10 生物科学
A02 解剖、生理	C02 解剖、生理	F20 化学
A03 生物化学、化学、病理、微生物	C03 生化学、化学、病理、微生物	
A04 行動、分布、漁場	C04 行動、分布、漁場	G 地学(含海洋学)及び気象学、地理学
A05 生態、生態系	C05 生態、生態系	G00 海洋学
A06 資源生物及び動態	C06 資源生物及び動態	G10 気象学
A07 資源調査法	C07 資源調査法	G20 地理学
A08 飼育	C08 飼育	G30 地質学(含古生物学)、考古学
A09 古書、古図	C09 古書、古図	G40 天文学
A10 捕鯨業	C10 産業	
A11 条約、法規	C11 条約、法規	H 農学、工学
A12 捕鯨技術及び鯨体の利用、製造	C12 漁業技術及び捕獲物の利用、製造	H00 農学
A13 経営、経済	C13 経営、経済	H10 畜産学
A14 地域社会	C14 地域社会	H20 水産学(含資源、管理、漁業法)
A15 社会科学	C15 社会科学	H30 獣医学
A16 捕獲統計	C16 捕獲統計	H40 工学、工学技術一般
A17 生物統計	C17 生物統計	
A18 資源統計	C18 資源統計	J 数学(含統計学)及び物理学
A19 その他統計	C19 その他統計	J00 数学
A20 論文	C20 論文	J10 物理学
A21 小説、随筆、講演録	C21 小説、随筆、講演録	J20 統計学
B 鯨類以外の海産哺乳類と海鳥	D A～C以外の生物	K 社会科学
B00 総記	D00 総記	K00 社会科学
B01 進化、発生、形態、細胞、組織、分類	D01 進化、発生、形態、細胞、組織、分類	
B02 解剖、生理	D02 解剖、生理	L 文学、児童図書
B03 生化学、化学、病理、微生物	D03 生化学、化学、病理、微生物	L00 文学
B04 行動、分布、漁場	D04 行動、分布、漁場	L10 児童図書
B05 生態、生態系	D05 生態、生態系	
B06 資源生物及び動態	D06 その他	M 辞書、辞典、名簿、目録
B07 資源調査法		M00 図鑑、図説、図録
B08 飼育	E 生物学及び生態学(含環境学)	M10 辞書、辞典
B09 古書、古図	(生物学)	M20 名簿
B10 産業	E00 生物学一般	M30 目録
B11 条約、法規	(生態学)	
B12 漁業技術及び捕獲物の利用、製造	E10 総記	N その他
B13 経営、経済	E11 海洋生態系	N00 哲学
B14 地域社会	E12 河川生態系(含湖沼)	N10 歴史
B15 社会科学	E13 生体内生態系	N20 語学
B16 捕獲統計	E14 極地生態系	N30 地図
B17 生物統計	E15 人間系と生態系	N40 美術、娯楽、スポーツ(芸術全般)
B18 資源統計	E16 その他の生態系、生態学	N50 写真集(鯨、捕鯨)
B19 その他統計	(環境学)	N60 その他
B20 論文	E20 総記	
B21 小説、随筆、講演録	E21 環境保護、自然保護	

当図書室の開室日時は、平日・第2、4土曜日の12時～13時を除き10時～12時、13時～16時まで開室しています。当研究所の仕事状況により、開室日の変動がありますので、利用を希望される場合には当研究所 HP もしくは、太地事務所まで問い合わせください。

ここで筆者よりお勧めしたい書籍が2冊ありますのでご紹介します。来室の際は、ぜひ手に取っていただけると幸いです。

「クジラと日本人」大隅清治（著）、（株）岩波新書（発行所）、2008/4/18（発行日）

2004年まで当研究所の理事長も務められ、1967年から2006年まで国際捕鯨委員会（IWC）科学委員会の委員も務められた、大隅清治先生が手掛けた書籍です。多くの鯨類関連の書籍は、鯨類の生態や、鯨食の紹介、鯨類の資源量に関するものが多く、初めて鯨を学ぶ方からすれば、少々難しいものばかりですが、こちらの書籍は鯨に関して初心者の方でも分かりやすく、鯨類について理解いただける内容となっています。

鯨類の生態、鯨食文化、捕鯨の歴史、鯨の資源量推定等についてだけでなく、IWCや、海外の反捕鯨活動についても幅広く扱われており、筆者も拝読させていただきましたが、鯨について深く理解することができました。



図3. 書籍「クジラと日本人」表紙。

「鯨類・鰐脚類」西脇昌治（著）、東京大学出版会（発行所）、1965/9/25（発行日）

鯨類の年齢査定の研究において先駆的な研究をされ、またその反面水族館のようにイルカを主とした海獣類を飼育する施設の建設、その海獣類の飼育方法について深く関与され、太地町立くじらの博物館の設立時にも尽力された西脇昌治先生が手掛けた書籍となります。

鯨類の生態、体の内臓や骨格などの構造について詳しく著された内容であり、鯨類を研究されている方には大変重宝された一冊と聞いています。また鯨類と同じ海産哺乳類でもある、アシカ、オットセイなどの鰐脚類についても詳しく著されているので、鰐脚類を学びたい方にもおすすめの一冊です。

上記の書籍以外にも、鯨類の図鑑や写真集、全国の水産関連機関からの交換雑誌などを閲覧することができます。また資料の閲覧だけでなく、読書をしながら静かな時間を過ごされたい、仕事・勉強に集中されたい方々にも、当図書室の利用を歓迎しておりますので、ぜひご利用の予約をお待ちしております。



図4. 書籍「鯨類・鰐脚類」表紙。

続いて開室以降の図書室の活動について紹介してまいります。外部へのイベント参加、図書室内での企画展開催といった活動をおこなってきました。その中より、いくつかご紹介させていただきます。

図書館総合展2024「あなたも使える専門図書館」へのパネル参加

本展は、全国から図書館関連に属している方々が集結し、交流を行う展示会です。その企画の一つである「あなたも使える専門図書館」に、当図書室の紹介パネルを出展しました。

展示パターンとして、ネット展示と会場展示の2つに分けて行われました。ネット展示は図書館総合展のホームページに図書室の紹介が掲載され、こちらの展示は全国からどこでも閲覧可能な展示となっています。もう一つの会場展示は、2024年に開催した際は11月5日～7日までの期間、神奈川県横浜市にあるパシフィコ横浜を会場に展示場を設けてパネル展示を行いました。

実際に筆者も展示会場である横浜へ赴き、自館の紹介だけでなく、図書の管理に関した機械、道具などを手掛ける企業たちが実演をしながら自社のPRもおこなっており、図書を取り扱う者からすれば、とても有意義な時間を過ごすことができ、今後の図書室での活動に生かせるものを学べる場所でありました。

企画展「クジラ博士たちの足跡」

本稿第2項でもご紹介した本施設の夏休みイベントの一つの企画として、日本の鯨類学研究者として有名な3名のクジラ博士をテーマにした企画展「クジラ博士たちの足跡」を開催しました。

本企画展は、鯨類学研究者であった大村秀雄先生、西脇昌治先生、大隅清治先生に関する展示を行い、3名の研究者がどのような功績を残されたかを紹介するとともに、先生方の紹介パネル、生前著された書籍・寄稿文、先生方のスナップ写真を展示しました。少々内容が難しい展示内容・部分もありましたが、3名の先生方を含めた多くの研究者によって日本にとどまらず世界の鯨類学が深化し、多くの専門領域を解明されてきたことを認識していただける機会となりました。

企画展「大隅清治博士の歩んだ道」～鯨類研究と太地町との関わり～

「クジラ博士たちの足跡」で紹介した3名の先生のうちのお一人、大隅清治先生の歩まれた人生の細部を題材にし、展示を行いました。展示内容は、先生の研究生生活紹介パネル、著された書籍・寄稿文、スナップ写真のほか、受賞された賞状、関連グッズの展示も行い、前述の「クジラ博士たちの足跡」よりも展示量が多めの企画展になりました。

特に注目の展示として、太地町と先生との関わりを3つの項目に分けて紹介した展示があり、本稿冒頭でも紹介した「太地町立くじらの博物館」、次に腹びれのあるイルカ「はるか」、そして「森浦湾くじらの海」構想という3つの展示で、それぞれ先生と太地町がどのような関わりであったかを紹介しました。

一人の研究者に焦点を当てた企画展は、当研究所として初めての試みであったかと思います。当研究所に多大なる貢献をされた大隅先生ですが、現在当研究所職員の半数が先生の過去を知らず、唯一の手掛かりであった先生が自身の人生について著した「クジラを追って半世紀一新捕鯨時代への提言」を参考にし、先生の歩まれた人生を追いかけていきました。

筆者も入所するまで大隅先生の事は全く知りませんでした。しかしながら、藤瀬良弘理事長をはじめ、先生と関わりのあった方々が当展示を通して当時を懐かしむ話を聞き、多くの研究者に影響を与え、日本の鯨類研究を牽引されていたという印象を受け、この企画展を開催できたこと、携わらせていただいたことを大変光栄に感じました。



図5. 企画展「クジラ博士たちの足跡」ポスター。



図6. 企画展「大隅清治博士の歩んだ道」～鯨類研究と太地町との関わり～ポスター。

おわりに

筆者は当研究所に入所し今年の1月に4年目を迎えました。生まれも育ちも太地町であり、大学へ進学した4年間と入所当時1年間で東京で過ごした期間を除くと、23年間太地町で暮らしています。本施設が建立された一帯は、幼少期の頃森林が生い茂る区域であり、近くには太地町の鯨に関する名所のひとつであるくじら供養碑のある岬「梶取崎」、太平洋を一望できる「平見台地展望台」といった景観を楽しむ場所しかありませんでした。しかし本施設をはじめ、老人ホーム、こども園、ホテルといった地域住民と観光客が訪れるような施設が建ち始め、当時からは想像できないほど辺り一帯の開発が進み、以前は地元住民もなかなか道を通らない区域となっていました。現在は地元住民だけでなく観光客の方も徐々に足を運んでくださるほど栄えてきました。

開所1年目は大変立派な施設が建立され話題になった反面、指定管理者としてどのように運営するのかを太地町と協力しつつ試行錯誤する日々を送ってきました。筆者も、開館前の準備期間より、特に図書室の開室準備に注力し、資料整備や保管面で携わらせていただきました。2年目は、運営方針などが固まり始め、本稿で紹介したイベントをはじめ、当研究所主催の一般向け公開講座、太地町も属している和歌山県東牟婁郡地域の小・中学校の施設見学受入れといったイベント企画を行い、地域への貢献をしてきました。また、本施設は世界の研究者の活動拠点地でもあり、実際に国際会議の場としても利用され、本施設を海外に発信できる機会をいただき、1年目と比較すると確実に活動範囲が広がったと感じています。3年目もこれまでの経験を生かし、さらに本施設と当研究所が飛躍していけるよう、役職員一丸となり日々精進してまいりますので、今後の活動に注目していただければ幸いです。最後に、本稿執筆にあたり指導いただいた久場朋子室長に感謝申し上げます。

参考文献

- 大隅清治. 2008. クジラを追って半世紀—新捕鯨時代への提言— (初版). 成山堂書店. 東京. 231 頁.
- 大隅清治. 2019. クジラと日本人 (第2版). 岩波新書. 東京. 212 頁.
- 大隅清治. 2012. [シリーズ：ここが知りたい No.3] 太地町の「森浦湾くじらの海」構想. 鯨研通信 455 号：11-13 頁.
- 鯨研通信編集委員会. 2004 年 6 月. 日本鯨類研究所の各部紹介 (I). 鯨研通信 422 号：9-15 頁.
- 清家紀子. 2003. 及川文庫の開設にあたって思うこと. 鯨研通信 419 号：15-19 頁.
- 西脇昌治 (著)・藪内正幸 (画). 1965. 鯨類・鰭脚類 (初版). 東京大学出版会. 東京. 439 頁.
- 日本鯨類研究所. 2024. 一般財団法人日本鯨類研究所太地事務所の開設について. 鯨研通信 502 号：23-25 頁.
- 日本鯨類研究所. 2024. 「全国鯨フォーラム in 太地」の開催. 鯨研通信 504 号：27-28 頁.
- 日本鯨類研究所. 2024. 図書館総合展 2024「あなたも使える専門図書館」へのパネル参加. 鯨研通信 504 号：29 頁.
- 日本鯨類研究所. 2025. 和歌山県太地町で夏休み特別イベントを開催. 鯨研通信 507 号：31 頁.
- 藤瀬良弘. 2026. 鯨研叢書 No.18 国際鯨類施設 夏休み特別イベント「クジラ博士になろう」実施報告書. 日本鯨類研究所. 148 頁.

日本鯨類研究所関連トピックス

(2026年3月～2026年5月)

基地式捕鯨生物調査

本年度の基地式捕鯨における生物調査は、全国の漁業根拠地において進められている。今季は、外房捕鯨株式会社・太地漁協グループおよび株式会社鮎川捕鯨グループの2グループが、石巻市を皮切りに釧路市、網走市、八戸市などへ拠点を移しながら、各海域で順次操業を行っている。

各地の鯨体処理場では、生物調査員が鯨類資源の科学的管理と持続可能な利用に資するため、調査活動を継続している。今季の調査期間中には、緊急地震速報や津波警報が3度発令されたが、その都度、調査員間で迅速に連絡を取り合い、安全確認を行った上で調査を継続した。操業は秋まで続く予定であり、今後も各地で生物調査が順次実施される見込みである。

サンマ資源・漁海況検討会議

令和7年度第2回サンマ資源・漁海況検討会議が2026年3月3日および4日に神奈川県横浜市のスマートレンタルスペース belle 関内 601 にて開催され、田村参事が“北西太平洋で鯨類が捕食していたサンマの割合や捕食量の経年変化について”を発表した。また、近年のサンマの分布と資源量の変動について、鯨類の食性や分布の変化の観点からコメントした。

第5回国際鯨類施設公開講座2026「鯨資源の新しい活用 捕鯨業で生じる未利用部位を活用し地域の海を再生する」

令和元年の商業捕鯨再開以降、当研究所では、捕鯨業の経営強化につながる技術開発の一環として、1頭当たりから得られる利益を向上させるため、解体時に発生する骨および内臓残渣等の利用法や、鯨体解体作業中に発生する廃水の効率的な処理法の開発に取り組んできた。

3月4日実施の本公開講座では、イルカ漁業由来廃水に適した膜分離活性汚泥法の開発、その処理水および太地近郊で採集された海藻2種を用いた廃水利用法の検討、ならびに鯨骨残渣を用いた漁礁の開発について、専門家による講演が行われた。パネルディスカッションでは、地域資源として鯨を活用するためには、研究機関と漁協との連携、漁業者の収入向上につながる取り組み、地域全体で循環型の資源活用システムを構築することが重要であるとの意見が出された。また、海藻養殖によるCO₂吸収対策を進めることで、ブルーカーボンクレジットなどの新たな制度を活用した収入源の確保についても提案があった。平日の午前中に開催されたにもかかわらず、約40名の参加があり、参加者からは、処理水・鯨骨の有効活用を藻場再生や漁業振興につなげる取り組みへの高い関心が示された。また、地域と連携した継続的な報告・実証を望む声も寄せられた。

2025/26年度南極海鯨類資源調査（JASS-A）の帰港

南極海鯨類資源調査（JASS-A）に従事した第三勇新丸と第二勇新丸が、全100日間の航海を終え、3月12日宮城県塩釜港に帰港した。この調査航海には、当研究所から磯田辰也調査団長（第三勇新丸）と川崎南門調査員（第二勇新丸）らが参加した。また、今期は、チリ共和国の研究機関 CEQUA のホルヘ・アセベド博士も第三勇新丸に乗船した。本計画は、南極海における大型鯨類の資源量とそのトレンドの研究並びに大型鯨類の分布、回遊、系群構造の研究を主目的に日本政府が策定を行い、第68a回IWC科学委員会に提出され支持を受けている。調査では、非致死的手法により、南緯60度以南、東経130度から東経170度の海域で、鯨類の目視情報の収集、鯨類の皮膚標本の採集、衛星標識の装着及び海洋観測等を精力的に

実施した。調査結果は当研究所のホームページ上に公表された他、第70回IWC科学委員会に報告され、高い評価を受けており、さらにCCAMLR（南極の海洋生物資源の保存に関する委員会）生態系モニタリング管理作業部会（WG-EMM）等でも報告される予定である。なお、本データと標本は、当研究所が主体となって解析を進めている。

定時理事会

3月25日に当研究所定時理事会を開催し、①「令和8年度事業計画（案）及び収支予算案）承認の件」②「諸規程一部改正の件」③「重要な使用人の解任及び選任の件」④「臨時評議員会の開催の件」について提案され、原案どおり可決された。

臨時評議員会

3月25日に当研究所臨時評議員会を開催し、「理事の選任の件」について提案され、原案どおり可決された。

母船式捕鯨生物調査

4月18日より、母船式捕鯨業における生物調査が実施されている。捕鯨母船「関鯨丸」率いる船団は、4月18日に下関港を出港し、太平洋においてニタリクジラを主体とした操業を開始した。その後、ナガスクジラ操業へ移行し、5月16日からはオホーツク海におけるナガスクジラ操業を実施している。当研究所からは3名の職員が生物調査員として乗船しており、鯨類資源の科学的な管理および持続可能な利用に資するため、各種生物調査を実施している。なお、本航海は6月7日の仙台港を含む3回の途中入港を経て、12月8日まで実施される予定である。



写真．ナガスクジラの遊泳。

豪ブルーム市長等議会関係者の来訪

4月21日、太地町と姉妹都市関係にあるオーストラリア・ブルームより、Chris Mitchell（クリス・ミッチェル）市長ならびに議会関係者数名が、国際鯨類施設および日本鯨類研究所太地事務所を訪問し、太地事務所職員にて対応した。一行は、終始和やかかつ友好的な雰囲気の中で施設を見学された。ミッチェル町長は、血水関係のリサイクル研究に大変興味を示され、また文化交流の一環として鯨食についても大変好意的に話しておられた。ミッチェル町長自身もまぐろ船の監視に従事しているとのことで、漁業問題に

も深い関心を持たれており、DNA 研究室では杉本太郎主任研究員による説明、環境化学研究室では安永玄太研究主幹による説明に熱心に耳を傾けていた。また、国際鯨類施設および図書室については池田礼未課長が案内した。太地事務所の充実した施設に加え、紀州材を使用した図書室、外国語の古い蔵書、ならびに研修ホールについても、一行は感銘を受けている様子であった。

春季鯨類資源調査の出港と実施

春季鯨類資源調査の目視調査船2隻（勇新丸、第二勇新丸）が出港した。この調査は、ヒゲクジラ類の資源量推定と系群構造に関する情報収集を目的として、目視を中心とした非致死的手法により実施される。4月24日に山口県下関港を出港した勇新丸には、第一研究部門の川崎南門研究員が乗船し、オホーツク海と太平洋の東北・北海道沿岸から沖合海域で調査を行い、7月10日に宮城県塩釜港に帰港する計画である。4月21日に宮城県塩釜港を出港した第二勇新丸には、第一研究部門の竹之内希葉研究員が乗船し、太平洋の沖合海域を中心に調査を行い、6月4日に同港へ帰港する計画となっている。

第70回IWC科学委員会の開催

本委員会は、リンジー・ポーター議長（英国）のもと、4月27日から5月8日までスロベニアのブレッドで開催された。なお、今回は隔年開催に変更されて以降、初めての会議であった。会議には26加盟国の科学者のほか、招待科学者、オブザーバー、NGO等を含む総勢257名が参加した。日本からはオブザーバーとして水産庁1名、当研究所3名（松岡耕二理事（代表団代表）、勝俣太貴主任研究員、村田陽菜研究員）、通訳2名の合計6名が参加した。日本は、商業捕鯨による捕獲記録等の情報共有に加え、IWC/日本共同北太平洋鯨類目視調査（POWER）および北太平洋（JASS-NP）・南極海（JASS-A）における調査計画ならびに航海報告書、JASS-A 中間レビューワークショップ報告書など計17編のドキュメントを提出し、積極的な情報提供に努めた。これらの貢献に対して科学委員会から謝意が表明された。今回の報告書はIWC ホームページで閲覧可能である。次回は2028年に開催され、議長は米国（NOAA）のエイミー・ラング女史が務める予定である。



写真. 国際鯨類施設を訪問中のブルーム市議会議員。



写真. 第70回IWC SC 会場の様子。

太地町の鯨供養祭に参列

4月29日、太地町梶取崎のくじら供養碑において、太地町漁業協同組合主催による「くじら供養祭」が執り行われた。しめやかな雰囲気の中、太地町漁業協同組合や捕鯨 OB 会の関係者ら約 30 名が参列し、鯨の恵みに感謝するとともに、その御霊に哀悼の意を捧げた。当研究所からは、安永玄太研究主幹および池田礼未課長が出席した。

ゴメス国際アドバイザーが旭日小綬章受章

4月29日、日本政府は2026年春の勲章受章者を発表し、海洋生物資源の持続的利用の分野における日本の政策推進に寄与した功績が認められ、当研究所ガブリエル・ゴメス・ディアス国際アドバイザー（元当研究所広報室長）が旭日小綬章を受章した。当研究所にとっても大変な名誉である。



写真. 記念撮影。

国際鯨類施設での鯨の特別講演

5月20日、国際鯨類施設研修ホールにおいて、「クジラ博士による特別講演 クジラとは何か？—その生き残り戦略と繁栄—」と題し、当研究所の加藤秀弘顧問による特別講演が執り行われた。参加者は関係者を含め約 80 名であった。本講演は、太地町の職員研修として行う講義を、町民の方々にも広く聴講いただけるよう、昨年度より特別講座として町民にも公開する形をとっている。今年度は昨年度よりも幅広い層の参加者が見受けられ、町民にも浸透しつつある様子がうかがわれた。内容については、地球環境に関する概説から、鯨の進化の過程やその歴史に至るまで、難しいテーマについても、加藤顧問がユーモアを交えた語り口で分かりやすく説明され、聴衆から笑いが起こる場面もあり、終始和やかな雰囲気の中で進められた。



写真. 講演の様子。

ノルウェー研究者による講演会

5月25および28日にノルウェーの研究者2名を講師として迎え、講演会が開催された。第1回ではLars Kleivane 博士より、ノルウェーにおける鯨類を対象としたバイオロギングおよびテレメトリー研究について講演頂いた。第2回では、ノルウェー極地研究所のElling Deehr Johannessen 氏より、ノルウェーによる南極海研究の取組について講演いただいた。両講演を通じて、ノルウェーにおける先進的な調査手法や国際的な研究・管理の視点に触れ、今後の研究における連携を考えるうえでも有益な機会となった。



写真. Lars Kleivane 博士の講演。

定時理事会

5月27日に当研究所定時理事会を開催し、①「令和7年度事業報告（案）、計算書（案）及びこれらの附属明細書（案）の承認の件」②「定時評議員会の開催の件」について提案され、原案どおり可決された。

Lars Kleivane博士との調査技術交流およびMINTAG装着実験の実施

5月27日調査船勇新丸が函館港より出港した。本調査航海にはLars Kleivane 博士が同乗し、日本鯨類研究所が実施する衛星標識装着実験やバイオロギング手法に関して実地での技術交流が行われた。日本鯨類研究所からは勝俣太貴主任研究員、川崎南門研究員が参加し、Lars Kleivane 博士が開発した調査機材への理解を深めた。また本調査航海では、日本とNAMMCO（北大西洋海洋哺乳類委員会）が主導する、鯨類の移動経路を解明するための小型衛星標識の開発プロジェクトであるMINTAGの装着実験も実施された。MINTAGによる鯨類の追跡結果はQRコードから閲覧できる。



写真. Lars Kleivane 博士による装着用機材の説明の様子。

日本鯨類研究所関連出版物情報

(2026年3月～2026年5月)

[第70回IWC科学委員会関係会議提出文書]

- Government of Japan. 2026. Japan's Scientific Progress Reports on Large Cetaceans. Document SC/70/O/05 presented to the IWC Scientific Committee, Bled, Slovenia, 2026 (unpublished). 2pp.
- Hakamada, T., Haruna, M., Takahashi, M., Katsumata, T., Isoda, T. and Matsuoka, K. 2026. Research plan for Japan's dedicated cetacean sighting surveys in the North Pacific Ocean in summer 2026 and 2027. Document SC/70/O/13rev1 presented to the IWC Scientific Committee, Bled, Slovenia, 2026 (unpublished). 11pp.
- Institute of Cetacean Research. 2026. Report of the Mid-Term Review Workshop of the Japanese Abundance and Stock structure Surveys in the Antarctic (JASS-A Research Programme), 20-22 October 2025, Tokyo, Japan. Document SC/70/O/20 presented to the IWC Scientific Committee, Bled, Slovenia, 2026 (unpublished). 30pp.
- Isoda, T., Katsumata, T., Kawasaki, M., Hakamada, T. and Matsuoka, K. 2026. An outline of the research plan for the 2026/27 and 2027/28 JASS-A surveys in Antarctic Area V-East and Area I-West. Document SC/70/O/16 presented to the IWC Scientific Committee, Bled, Slovenia, 2026 (unpublished). 10pp.
- Isoda, T., Kawasaki, M., Acevedo, J., Izumiya, E., Matsumoto, T., Hirai, T., Maehashi, K., Nojima, S., Ohkoshi, C. and Matsuoka, K. 2026. Results of the Japanese Abundance and Stock structure Survey in the Antarctic (JASS A) during the 2025/26 austral summer season. Document SC/70/O/15 presented to the IWC Scientific Committee, Bled, Slovenia, 2026 (unpublished). 26pp.
- Katsumata, T., Kawasaki, M., Ohmukai, C., Yamazaki, M., Kasai, H., Abe, N. and Isoda, T. 2026. Results of the Japanese Abundance and Stock structure Survey in the Antarctic (JASS-A) during the 2024/2025 austral summer season. Document SC/70/O/14 presented to the IWC Scientific Committee, Bled, Slovenia, 2026 (unpublished). 25pp.
- Katsumata, T., Kawasaki, M., Takenouchi, K., Hirai, T., Maehashi, K., Suzuki, H., Hirose, R., Isoda, T., Kasai, H., Sasaki, Y. and Matsuoka, K. 2026. Results of the Japanese dedicated cetacean sighting survey in the North Pacific in 2025 summer season. Document SC/70/O/12 presented to the IWC Scientific Committee, Bled, Slovenia, 2026 (unpublished). 14pp.
- Katsumata, T., Kawasaki, M., Yamazaki, M., Matsuzaki, A., Adachi, K., Nagamine, M., Isoda, T., Maki, K., Sasaki, Y. and Matsuoka, K. 2026. Results of the Japanese dedicated cetacean sighting survey in the North Pacific in 2024 summer season. Document SC/70/O/11 presented to the IWC Scientific Committee, Bled, Slovenia, 2026 (unpublished). 12pp.
- Murase, H., Crance, J., Alps, B., Yoshimura, I. and Okoshi, C. 2026. Cruise report of the 2025 IWC-Pacific Ocean Whale and Ecosystem Research (IWC-POWER). Document SC/70/O/04 presented to the IWC Scientific Committee, Bled, Slovenia, 2026 (unpublished). 60pp.
- Murase, H., Crance, J., Duley, P., Yoshimura, I. and Kasai, H. 2026. Cruise report of the 2024 IWC-Pacific Ocean Whale and Ecosystem Research (IWC-POWER). Document SC/70/O/03 presented to the IWC Scientific Committee, Bled, Slovenia, 2026 (unpublished). 52pp.
- Nakamura, G., Yamada, C., Katsumata, T., Matsuoka, K. and Kato, H. 2026. Status Report of Conservation and Research on the western North Pacific Gray Whales in Japan, May 2024 - April 2026. Document SC/70/CMP/04 presented to the IWC Scientific Committee, Bled, Slovenia, 2026 (unpublished). 8pp.

[印刷物（研究報告）]

磯田 辰也：2026. チリ パタゴニア海域のCEQUA生態系調査 参加報告及び同科学者のJASS-A参加. 鯨研通信 509: 1-10.

ガブリエル・ゴメス・ディアス：2026. 地中海の幻の珍味、イルカ肉のモッシャーメ. 鯨研通信 509: 11-24.
当研究所：2026 鯨研通信 509. 日本鯨類研究所. 32pp.

Celemín, E., Acevedo, J., Hagberg, L., Castro, C., Castrillón, J., Valenzuela, P., Pastene, L. A., Tiedemann, R. Genomic signatures of migratory preference and historical whaling in eastern South Pacific humpback whales. *Commun Biol* 9, 630. <https://doi.org/10.1038/s42003-026-10037-x>.

Chukai, Y., Arisumi, K., Yasunaga, G., Sakai, H., Tatara, Y., Kasai, S., Yamashita, Y., Ishiyama, E., Kiyokawa, K., Ozaki, T. 2026. Balenine alleviates neurodegeneration and inflammation in a mouse model of Parkinson's disease. *Biochimica et Biophysica Acta (BBA) - General Subjects*. Volume 1870, Issue 7.

[出版物（雑誌新聞・ほか）]

久野 友愛：2026. 今取り組んでいるのは、大型ヒゲクジラの調査・研究. 東海大学海洋学部 2027: 29.

[学会発表]

Yanai, R., Yasunaga, G., Sakai, H., Fujise, Y., Asagiri, M., Mitamura, M. Dietary intake of whale oil containing ω -3 long-chain polyunsaturated fatty acids attenuates choroidal neovascularization in mice. 国際眼炎症学会, USA・カリフォルニア. 2026/5/23-26.

石井 天志朗、石井 千晴、酒井 大樹、井上 聡子、久保 和希、尾中 孝彰、三田 真史、秋田 健、安永 玄太、浜瀬 健司：北西太平洋産ミンククジラにおけるアスパラギン酸、アラニンおよびセリン鏡像異性体の体内分布解析. 第86回分析化学討論会. 久留米シティプラザ, 福岡. 2026/5/30-31.

井上 聡子、酒井 大樹、安永 玄太、藤瀬 良弘：衛星標識を用いた太地町沿岸域に生息するハナゴンドウおよびマダライルカの移動追跡研究. 令和8年度日本水産学会春季大会. 東京海洋大学 品川キャンパス. 東京. 2026/3/29.

田村 力、磯田 辰也、藤瀬 良弘、巢山 哲：北西太平洋で鯨類が捕食していたサンマの割合や捕食量の経年変化について. 第2回サンマ資源・漁海況検討会議. スマートレンタルスペースbelle関内601. 神奈川. 2026/3/3.

[放送・講演]

磯田 辰也：クジラ調査船 航海終えて帰港 南極海で最先端の資源調査. 東日本放送. 宮城・塩釜港. 2026/3/12.

安永 玄太：ヒゲクジラ類におけるイミダゾールジペプチドの蓄積特性とその意義—生理機能および食品科学的視点から—. 第16回 イミダゾールジペプチド研究会講演. サポート高松. 香川. 2026/5/16.

京きな魚（編集後記）

2026 年も折り返しを迎えました。春先には東日本大震災から 15 年という節目を迎え、防災や地域のつながりについて改めて考える機会となりました。また、中東情勢の緊迫化に伴うエネルギー価格の上昇や物価への影響は、遠い世界の出来事が私たちの日常と密接につながっていることを実感させました。社会が大きく変化する時代だからこそ、目の前の日常や人とのつながりを大切にしながら、一つひとつの出来事を見つめていきたいものです。本号は南極海鯨類資源調査、母船式捕鯨の生物調査、国際鯨類施設・図書室などと、当研究所が行っている事業を幅広く紹介しています。皆さまにとって、新たな気づきや交流のきっかけとなれば幸いです。暑さが本格化する季節を迎えます。どうぞご自愛いただき、実りある夏をお過ごしください。本年度より本誌の発行月を実際の発行月に合わせ、ひと月繰り下げることとなりました。ご理解のほどよろしくお願いいたします。（早武真理子）